姫巫女候補の侍女

緇菟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫巫女候補の侍女

【Ｎコード】
Ｎ９９３６Ｇ

【作者名】
緇菟

【あらすじ】
貧乏貴族の娘、ルイーゼの妹がなんと姫巫女候補に…！？１ヶ月の試練に行く妹の為に父親に命じられ渋々、王宮に着いて行く事になった。王宮では今まであり得ない事の連続でルイーゼは悪戦苦闘の日々……。

第1章（前書き）

めちゃめちゃヘタですが楽しく読んでくださったら嬉しいです

第1章

「…信じられない…」

わたしは頭から足の爪先まで青ざめながら呟いた。

事の発端は1通の手紙。

わたし、ルイーゼの住んでいるこの国では10年に1度だけ姫巫女を決める習わしがある。

姫巫女とは10年間、月詠みの力でこの国に繁栄をもたらせる巫女様の事。

姫巫女になる資格は若い未婚女性で月詠みの力が優れている以外にはなく、農民の娘から貴族の娘まで身分は関係ない。

だから…わたしの家（貧乏貴族）も一応、姫巫女の一次試験には参加した。

わたしとアヴィス、ミルネの妹2人。

そして一次試験結果が今日この家に届いた。

そう…それが問題の手紙。

自慢にもならないけどわたしは容姿も月詠みの力もかなり人並み。

案の定、わたしは見事落選。

姫巫女に興味なんてないからわたしはとても安心した。

だけど…妹、アヴィスがなんと姫巫女候補になってしまったの。

「わたしが…姫巫女候補…？信じられないわ…！」

アヴィスは可愛らし顔を真っ赤にしながら喜んだ。

この国の女の子にとって姫巫女になるのは夢。

姫巫女になったらどんな贅沢も思いのままで１０年頑張ればどんなお相手とでも結婚出来るって言うオマケ付き。

わたしだったらいくら贅沢三昧でも１０年なんて絶対ご免だけどね…。

「アヴィス、よかったわね」

わたしは真っ赤な顔で喜んでいるアヴィスに満面の笑みでそう言った。

「ルイーゼ姉様、ありがとう！でも、わたし…とても不安なの…」

真っ赤にしていた顔を急にアヴィスは曇らせた。

「…？どうして？」

「だって…姫巫女候補になったら遠くにある王宮に行って厳しい試

練があるんですもの…わたし1人きりで厳しい試練に耐えられるかどうか…」

確かにここは国の最果てにあるので、王宮に行くには最速でも2日もかかる。

しかも姫巫女の試練の期間は1ヶ月。

屋敷で慎ましく暮らしてきたアヴィスにはちょっと厳しいかもしれない…。

そんな不安顔のアヴィスにお父様はとんでもない言葉を発した。

「アヴィス、心配はいらない。姫巫女の試練の間ルイーゼにお前の世話をしてもらうからね」

「なっっっ!?」

「本当？お父様」

お父様の言葉にわたしは言葉を失い、アヴィスはパッと顔を輝かせる。

「ああ、本当だとも、ルイーゼも勿論行ってくれるだろう？」

「…お父様…わたしイヤです！」

当然の事の様に言うお父様に青ざめた顔でわたしは言った。

「何を言うんだ。お前の可愛い妹の為だよ？」

確かにアヴィスはわたしの可愛い妹、ミルネと2人わたしを慕ってくれてる。

でも、それとこれとは全く話が別だわ。

「…でも！」

「ルイーゼ落ち着きなさい。何も10年間ずっと世話をしろと言っているわけじゃない。試練の1ヶ月間だけだよ」

尚も抗議しようとするわたしにお父様は静か言った。

「……」

「わかったね？お前も王宮に行きアヴィスを支えてあげなさい」

黙り込んだわたしにお父様はそう言うと早速、近くにいた侍女たちに王宮へ行く準備を指示し始めた。

頭から足の爪先まで青ざめたわたしはただ、ただ、お父様を見つめる事しか出来なかった…。

∵

第2章

――――ガラガラガラ…

軽快に走る馬車の音に鬱陶しさを感じながらわたしは飛び去る風景をぼんやりと眺めていた。

問題の手紙が届いた翌日、王宮から無駄に贅沢な装飾を施した馬車が姫巫女候補であるアヴィスを迎えに来た。

準備もそこそこにお父様はアヴィスと嫌がるわたしを王宮に行くべく馬車に詰め込んだ。

「ルイーゼ、もし試練期間の1ヶ月内に帰って来た時はこの屋敷にお前の居場所はないと思いなさい」

別れ間際のお父様の言葉を思い出してわたしはムスっとした顔になった。

別れ間際に励ますでも別れを惜しむでもなく、実の娘を脅すなんて何て親なの！

「ルイーゼ姉様…大丈夫？」

馬車の中、ムスっとした顔のわたしにアヴィスが気遣う様に尋ねてくれる。

「ええ、大丈夫、1ヶ月くらい…必ず耐えてみせるから」

ふてくされつつも気遣ってくれるアヴィスへ無理に笑みを作り答える。

そんなわたしとアヴィスを乗せ馬車は昼夜休む事なくどんどん王宮に近づいて行く。

そしてもう少しで城下町に着こうかと言う時、鬱蒼と茂った森の中で馬車が急に停まった。

「…？」

急に停まった事を不思議に思いわたしとアヴィスは顔を見合わせる。

「あの…どうかしたんですか？」

馬車の従者に窓越しに尋ねてみたけど全く返事ない。

「…？あのっ！？」

おかしいと感じ、馬車の扉を開けてもう1度従者に声をかけようとしたその時、馬車から降りるわたしの眼の前に体格の良い男が立ちふさがった。

「あなた…誰？」

辺りが薄暗い為、男の顔はよくわからない。

「……お前が姫巫女候補か？」

男は質問を無視してそう言うとわたしの腕を掴もうとした。

「汚い手で触らないで！」

近づく手を叩き払い、わたしは男をきつく睨み付ける。

「気の強ぇー姫巫女候補だな」

何とも下品に笑いながら男は今度はわたしの胸ぐらを掴んできた。

「……汚い手で触らないでって言ったでしょ！！」

胸ぐらを掴んで来た事に怒りを覚え、わたしは男の足の脛を思いっきり蹴飛ばしてやった。

「ぐぅっっ！！」

貧乏と言えども一応、貴族のご令嬢。

ご令嬢に反撃されるなど全く考えていなかった男は脛の痛みで掴んでいた胸ぐらの手を離し、その場にうずくまる。

「ふん！」

乱れたドレスを整え、辺りを見回すと馬車の影に怯えた様子で隠れている従者が目に入る。

「……ねぇ従者さん、あなた剣は持ってるかしら？」

助ける事もしない従者に怒りを覚えつつ、わたしは尋ねた。

「は…はいっっ！一応…ございますが…？」

「そう、ではその剣わたしに貸していただけるかしら？」

震える声の従者にニッコリ微笑みながらわたしは手を差し出した。

「は…はぁ…？」理解出来ないと言う風な表情をしながらも従者はわたしに自分の剣を貸してくれる。

「ありがとう…これからわたしがあの男の注意を引き付けてます。あなたはその隙に馬車に乗って逃げてください」

剣を受け取りながらわたしはうずくまっている男に聞こえないようにそっと従者に告げる。

「えぇっ！？しかし…」

「こんのぉ…ふざけた事しがって！！」

かなり困惑気味の従者の言葉を遮って、痛みにうずくまっていた男が突然立ち上がり腰にぶら下げてた剣を抜いた。

「あら？わたしと剣で戦うつもり？」

あまり手入れの行き届いていない従者の剣を構え、男を振り返るとクスリと笑う。

「……ナメやがって……！」

顔はよく見えないけど声から男がかなり怒っている事がわかる。

「あなたこそ、わたしが女だと思ってナメないで欲しいわね」

最初に言った通りわたしは容姿も月詠みの力も人並み。

そんなわたしにも１つ得意なモノがある。

それは――――剣術。

子供の頃から他の男の子たちに混じってずっと習ってきたから、そこら辺の男には負けない自信がある。

だけど……今、ドレスに身を包んでいるわたしには体格の良い男に勝てる見込みはない。

幸いにも男はまだわたしを姫巫女候補だと思い込んでて馬車の中のアヴィスの存在には気付いてはない様子。

せめてアヴィスだけでも…。

わたしはそう思いながら剣の柄を強く握った。

途端、わたしの背後にいた従者が素早く馬車に乗り込み、振り返る事なく走り出した。

「…くくくっ！見捨てられたな、お前！！」

見えなくなった馬車を見送り男は下品に笑い出した。

「ふふ、見捨てられたんじゃなくて無事逃げ出せたのよ。あの馬車

には大切な、大切な姫巫女候補様が乗っていたからね！」

「なんだとっっ！？この女ぁ…！」

わたしの言葉に男は更に怒り心頭でわたしに襲いかかってきた。

男の怒り任せに振り回す剣をわたしは辛うじてよける。

わたしの方が体格も力も弱い分まともに戦うのはかなり不利。

だから持ち前の身軽さを生かし振り回す剣を避け、男の体力を削いで隙を見て逃げようと考えてた。

でも…ドレスに身を包んでいるわたしは何時もより動きが鈍くなるし、履き慣れないヒールの高い靴が邪魔をする。

…ヤバイわね…

わたしは剣をよけつつも焦りの色が隠せない。

「ははははっ！さっきの勢いはどうした！？」

逃げるばかりのわたしを男は下品に笑う。

「うるさ…あっ！」

男の下品な笑いが癇に触って怒鳴ろうとした時、鬱蒼とした草に足元をとられてしまいその場に倒れてしまった。

「くくくっ！そろそろ終わりの様だな」

倒れているわたしに男は下品な笑いを浮かべながらゆっくりと近づいて来る。

「……くっ！」

倒れた体勢でもわたしは眼の前に近づいて来た男を睨み付ける。

「手間かけさせやがって…さぁ、覚悟してもらおうか！！」

睨み付けるわたしを見下しながら男はその手に持っていた剣を力一杯振り下ろした。

———もう……ダメ！！

ガギィィーー！…ンッッ！！

襲い来るであろう痛みにきつく眼をつぶるわたしの耳に鈍い金属音が響いた。

「……？あれ？痛くな…い…？」

鈍い金属音と襲って来ない痛みを不思議に思い、眼を開けてみると、わたしの眼の前では男の振り下ろした剣を見馴れない男の人が剣で受け止めていた。

「女性に乱暴するなんて感心しませんね」

剣を受け止めていた男の人が静かに言った。

その男の人はルビーの様な深紅の眼に艶やかな漆黒の長髪、そして…とても整った顔立ち。

どこをとってもため息が出る程、美しい男の人だった。

「お前…誰だ！？」

「わたしは宮中騎士ヴューイ、何故姫巫女候補の馬車を襲ったのです？」

「宮中…騎士！？…チッ！」

ヴューイと名乗る男の人が問うと男は舌打ちをし、慌てた様にその身を翻して鬱蒼とした森の中に消えて行った。

「――――はぁ…」

男の姿が見えなくなってわたしは大きく息をついた。

緊張のし過ぎのせいか頭がクラクラする…。

「大丈夫ですか？」

剣を納めたヴューイ様は座り込んでいたわたしに手を差出してくれた。

「はい、ありがとうござ……うっ……！！」

差出されたヴューイ様の手を掴み立ち上がろうとした途端、わたしの身体の全力が抜け、眼の前が夜の帳が落ちる様に徐々に暗くなっ

て行った。

クラクラする頭の隅でヴューイ様がわたしに何か言った様な気がするけどわたしは答える事が出来ずに暗い闇の中に落ちて行った…。

∵

第3章

「……んっ？……？」

気が付くとわたしは薄暗い部屋の馬鹿でかいベッドに寝かされていた。

「…ここは…？」

見慣れない場所とまだ寝ボケているせいで頭がちゃんと回らない。

とりあえずベッドから身を起こそうとするとわたしの手に違和感を感じた。

「……アヴィス……？」

わたしの手の先にはベッドの端で座ったまま寝ているアヴィスの姿があった。

何時もの綺麗な寝顔には涙の後も見える。

「アヴィス…ごめんね…」

静かに眠るアヴィスの手をそっと握り返す。

———コンコン。

不意に部屋の扉がノックされ、わたしはアヴィスを起こさない様に

ゆっくりと身体を起こした。

「ど、どなたですか……？」

「ヴューイです。入ってもよろしいですか？」

……ヴューイ？って誰だったっけ……？

聞き覚えのない名前にわたしは頭を捻る。

「あの……？」

「あ！すいません。どうぞお入りください」

ヴューイと名乗る人が再び声をかけてきたのでわたしは慌てて答える。

ガチャ…！

「あ！あなたはっ！」

扉から入ってきた人にわたしは思わず声をあげてしまった。

「良かった。気が付かれたんですね」

深紅の眼に優しい光を宿しながらヴューイ様はわたしに微笑んだ。

思い出した！！

わたしは王宮に行く途中、知らない男に襲われて……王宮騎士であ

るヴューイ様に助けて貰ったんだった！

「まだ調子が悪いのですか？」

一気に記憶を取り戻し固まるわたしにヴューイ様は心配そうな顔で尋ねてきた。

「い、いえ！大丈夫です！！危ない所、助けて頂いてありが……」

「シーッ、姫巫女候補が起きてしまいますよ」

ハッと我に返り、慌ててお礼を言おうとしたわたしにヴューイ様は自らの形の良い唇に指先をあてて言う。

「あ……！」

ヴューイ様の言葉にわたしは思わず手で口を押さえる。

「姫巫女候補を捨て身で守った侍女と聞き、どんな女傑かと思っていたのですがこんな可愛らしい女性とはね」

クスクス笑いながらヴューイ様は傍にあった膝掛けをそっと眠っているアヴィスに掛ける。

「侍女…？わたしがですか？」

「違うのですか？馬車の従者から姫巫女候補と女性が1人と聞いたので侍女かと？」

確かに……貴族のお嬢様となれば侍女や護衛が同行するの当たり前。

だけど、わたしの家（貧乏貴族）はそんな余裕はないのよ…。
姫巫女の試練に身分とか関係ないと言っても流石に侍女1人くらいいないと他の姫巫女候補たちにアヴィスがバカにされるかもしれないわね…。

はぁ～、仕方ない。

「いえ、違いませんわ。わたし姫巫女候補アヴィス様の侍女ルイーゼと申します」

心の中で大きなため息をつきつつ、わたしはニッコリ微笑んで自己紹介した。

「ルイーゼさんですね。よろしくお願いします。早速ですが今宵、姫巫女候補たちを歓迎する宴が催されます」

「宴…ですか？」

厳しい試練と聞いていたので歓迎の宴があるなんてちょっとビックリ。

「はい。歓迎の宴と言っても要はこれから試練を受ける姫巫女候補たちを王宮の皆にお披露目するのが目的なんです」

キョトンした顔のわたしに優しくヴューイ様は教えてくれる。

「なるほど…じゃ、気合い入れて行かないとですね」

「そうですね。でも今からあなたが気合い入れる必要はないですよ」

「あ…！」

ヴューイ様の言葉で無意識に眉間にシワが寄っていたみたいでヴューイ様はクスクス笑いながらながらわたしの眉間を軽くつついた。

ち、ちかい！近いっっ！

綺麗な顔には全く免疫のないわたしは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

漆黒の美しい髪

ルビーの様な深紅の眼

そんな美しい顔が近くにあったらどんな美女でも恥ずかしくてきっと俯いしまうと思う。

「では、わたしはこれで失礼しますね。そろそろアヴィス様の準備をされた方がいいですよ」

俯くわたしの頭上から笑いの含んだ声でヴューイ様が言った。

「ヴューイ様。色々とありがとうございました」

まだ赤い顔を上げ、部屋を出ていこうとしたヴューイ様にわたしはお礼を言う。

「頑張ってくださいね」

ヴューイ様はわたしに優しく微笑んで静か扉を閉めた。

パタン…

「はぁー…」

ヴューイ様が出ていった部屋に再び静寂が訪れ、わたしは大きなため息を洩らした。

姫巫女候補の手紙が届いてからもう、何度ため息を洩らしたかしら…。

「……さて、仕方ないから宴の支度を始めますか」

まだ赤い顔を両手で軽く叩き気合いを入れるとわたしは早速ベッドから飛び起き、、宴の支度に取りかかった……。

第4章

空に夜の帳が静かに降り、王宮の一際美しい大広間には煌びやかな衣装を身に纏った来賓たちが集まっていた。

「今宵は姫巫女候補たちの為にお集まり感謝します。どうぞ、厳しい試練を受ける姫巫女候補たちに暖かい言葉をあげてください」

大広間の上段からワイングラスを片手に持ち、美しい女性が宴に集まった来賓たちに穏やかな微笑みを向ける。

その女性は艶やかな銀糸の髪にアメジストの優しげな眼、額には美しさを引き立てるかの様に姫巫女様の証であるサークレットが輝いていた。

姫巫女様、綺麗な方だなぁ

わたしは目立たない様に大広間の隅っこから上段の姫巫女様を見つめていた。

姫巫女様の傍らでは国中から選ばれた5人の姫巫女候補たちが並んでいる。

その中にはモチロン美しく飾り立てたアヴィスの姿も。

「この姫巫女候補たちの前途に幸あらん事を！」

「幸あらん事を！」

姫巫女様の言葉で来賓たちは各々が持っていたワイングラスを天に掲げるとそれを合図に大広間に音楽が流れ始め宴が幕をあけた。

美しく飾りたてた来賓たちはキラキラ輝くシャンデリアの下、談笑したりダンスを踊ったりと楽しんでいる。

再びアヴィスに眼を向けると来賓たちに囲まれ談笑していた。

何時もの可愛い笑顔は些か引きつってるけど…。

アヴィスったら、あんなに緊張して大丈夫かしら…。

緊張気味のアヴィスを見てわたしは少し苦笑する。

わたしが侍女になる話をした時、アヴィスは猛反対した。

アヴィス曰く、

「姉様を呼び捨てなんて出来ない！」

…だ、そうで…。

でも、わたしからすれば『貴族のお嬢様』より『侍女』の方がある程度の自由があって都合が良いのよね。

わたしが1ヶ月も王宮でお淑やかに過ごすなんて多分無理だし……。

「……あの〜？」

談笑しているアヴィスを見つめていたわたしの背後で何とも間延びした声がした。

「はい？」

「あの、あのっ！……ルイーゼさん……ですよね…？」

振り返ったわたしの眼の前には何故か興奮している女の子が1人…。少しクセのある栗色の髪を頭の上で纏め、エメラルドのような眼をキラキラ輝かせてわたしを見つめている。

「そうですけど…？あなたは？」

「わたし、ソフィーナって言います！あなたと同じ姫巫女候補様の侍女をしています！やっぱりあなたが噂のルイーゼさんなんですね！！」

「はぁ……？噂って？」

わたしの問いにフィーナと名乗った女の子は興奮気味に大声で言った。

「今、王宮中ではあなたの噂で持ち切りですよ！捨て身で姫巫女候補様を悪漢から守った上に……王宮1の騎士ヴューイ様に抱きかかえて王宮に来たんですから！」

「え…？」

わたしはソフィーナの言葉に絶句してしまった。

だっ…だっ…抱きかかえられたですってっっ！？

「何だか楽しそうですね」

興奮気味のソフィーナの背後から笑いを含んだ聞き覚えのある声がした。

「ヴューイ様！」

「こんばんは。体調はもう大丈夫ですか？」

「はい。おかげさまで」

優しく微笑むヴューイ様の登場にわたしは少し俯きながら返事をする。

辺りをチラリと見回せば噂のせいか来賓たちの好奇と嫉妬の視線を感じた。

……勘弁して欲しいわ…。

「それは良かった。でもまだ無理してはダメですよ」

心の中で特大のため息をつくわたしにヴューイ様は優しく言った。

「は…」

「ヴューイ様」

返事をするわたしの言葉を遮るように誰かの甘ったる声がヴューイ様を呼んだ。

「イリアス嬢。こんばんは」

甘ったる声の方に視線を移すと艶やかな亜麻色の髪と眼を持つ綺麗なご令嬢が華やかな笑みを浮かべて立っていた。

「こんな所にいらっしゃったのね。今日こそはわたくしと踊っていただきますわよ」

ヴューイ様の腕に自分の腕を絡ませながらイリアス様は上目遣いで擦り寄る。

「残念ながらわたしはまだ仕事中なんです」

「あら、このような侍女とはお話する時間があってもわたくしとのダンスする時間はありませんの？」

困った様に微笑むヴューイ様の言葉にイリアス様は少し眉を顰めてわたしを一瞥する。

イリアス様の眼は完全にわたしを敵意してる。

いやいや、わたし全然関係ありませんから…。

「ヴューイ様。わたしそろそろ仕事に戻ります。お心遣いありがとうございました」

イリアス様の敵意むき出しの視線に冷や汗をかきながらわたしはヴ

ューイ様にお辞儀をする。

「そうですか。もし何か王宮で困った事があればわたしに相談してください。出来る限り力になりますよ」

「はい。ありがとうございます。では、失礼いたします」

優しく微笑むヴューイ様に再びお辞儀をするとわたしはヴューイ様に見惚れているソフィーナを引っ張りその場を逃げる様に離れた。

「はぁ…近くで見てもヴューイ様ステキでしたね」

華やかな大広間を離れ、人気ない庭園で夢心地のソフィーナが言った。

「わたしはイリアス様が怖かったわよ」

ため息をつきながらわたしは苦笑した。

「あ！それは仕方ないですよ。イリアス様はヴューイ様の花嫁候補の1人ですもん」

「花嫁候補……？」

「はい。今までヴューイ様は色々なご令嬢方と噂になられたのに結婚まで進まなかったんです。それに業を煮やしたヴューイ様のお父様が2人の花嫁候補をお決めになられて今日から1ヶ月内にヴューイ様は花嫁を選ばなくてはならなくなったんですよ」

「なるほど。だからあんなに敵意むき出しだったのね」
ソフィーナの話にわたしは納得した様に頷いた。
「花嫁候補になってもヴューイ様を狙ってるご令嬢は沢山いるでしょうからね。わたしも1度で良いからお近づきになりたいです」
「わたしには関係ないけどね。ところでソフィーナは仕事に戻らなくて大丈夫なの？」
まだ夢心地のソフィーナにクスクス笑いながらわたしは尋ねた。
「あ！そろそろ戻らないとお嬢様に叱られてしまいます。では、ルイーゼさんまたお話しましょうね！失礼します」
「うん。またね」
わたしの言葉にアタフタしてソフィーナは手を振りながら大広間に向かって走りだした。
「はぁ～……」
ソフィーナを見送った後、わたしはまた特大のため息をつくと紺色の空に浮かぶ下弦の月を見上げる。
この1ヶ月これ以上問題が起こりません様に。
下弦の月にそう願うとわたしも大広間に向かって歩きだした。

$\because$

第5章

歓迎の宴の翌日からアヴィスを含めた5人の姫巫女候補たちは知識、教養、月詠みの力を競う為に色々な試練を課せられた。

「アヴィス、大丈夫？」

姫巫女候補に与えられた1室で朝の支度の為、アヴィスの長く美しい栗色の髪を丁寧に梳きながらわたしは尋ねる。

「大丈夫。心配してくれてありがとう」

鏡越しに微笑むアヴィスの顔には疲労の色がみえる。

「あまり無理しちゃダメよ？」

「ええ、わかっているわ」

優しいアヴィスの事だからお父様や家の為に自分が頑張らないととか考えてるんじゃないかしら…。

わたしは鏡越しにアヴィスの顔を見つめ無意識にため息をついてしまう。

「最近ため息ばかりついてるわよ」

「うん。最近色々あったからため息がクセになってるみたい」

クスクス笑うアヴィスにわたしは苦笑してしまう。

――――コンコン

「姫巫女候補様。試練のお時間でございます」

ノックと共に王宮侍女が試練の時間を告げた。

「わかりました。すぐに参ります」

アヴィスがそう答えると王宮侍女の足音が遠ざかって行く。

「じゃ、行ってくるわね」

「うん。無理しない程度に頑張ってね」

ニッコリ笑うアヴィスにわたしは手を振りながら見送った。

「さてと……アヴィスが帰って来るまで何してよ」

アヴィスが試練に行ってしまうと侍女であるわたしは彼女が帰って来るまでかなり暇になる。

「ちょっと王宮探検でもしてみようかしら」

慣れない王宮生活の為、未だにゆっくり王宮内も見ていない。

滅多に来れない王宮だもん。探検するのも楽しいかも。

本来、屋敷に大人しくしてるのが苦手なわたしは王宮探検に出かけ

る為、扉を少し開けるて廊下の様子を窺う。

「誰もいないわね」

わたしはニッコリ笑うと王宮探検に出発した。

王宮内はとても煌びやかで廊下の床には深紅のフカフカ絨毯が敷き詰められ金銀や玻璃を細工した装飾品が所狭しと飾り付けられている。

「うわぁ～…！」

華美に飾り立てられた数々の部屋や廊下にわたしは目を見張る。

数時間後…。

わたしは王宮の庭園の植え込みに隠れてグッタリと座り込んでいた。

「……何か無駄に飾り立てたられてて見てるだけで疲れたわ……」

最初は何もかも物珍しく楽しく探検していたんだけど段々無駄に華美な内装に眼がチカチカしてきた。

よく、王宮に住む人たちは眼がチカチカしないわね。

わたしは芝生に寝転がり疲れた眼をゆっくりと閉じると庭園を吹き抜ける春風が優しく頬を撫で少しずつ眠り誘う。

「ヴューイ様ぁ〜！」

眠りかけたわたしの頭上から女の子たちの黄色い声が響いてきた。

ん〜…何事よ？

睡眠の邪魔されて少し不機嫌なわたしが植え込みの隙間から覗いてみるとそこには綺麗なドレスを纏ったお嬢様２人がヴューイ様を取り囲んで言い合ってるのが見える。

「ヴューイ様。次の宴の時こそはわたくしとダンスを踊ってくださいね」

「あら！ヴューイ様は次の宴はわたくしと踊るのよ」

ははは……ソフィーナの言う通り花嫁候補の他にもヴューイ様を狙ってるお嬢様方は多いのね。

寝転がった状態で頬杖をつきながらわたしは苦笑してしまう。

「おや？」

「ヤバっ！」

コッソリ覗いていた視線に気付いたのか、わたしが隠れている植え込みの方にヴューイ様が視線を向けた。

「お嬢さん方、今わたしは仕事中なので宴の話はまた次の機会しましょう」

何故かヴューイ様の声には笑いが含まれている気がする……。

「そんなぁ～」

「絶対ですわよ。ヴューイ様」

ヴューイ様の言葉に言い合っていたお嬢様2人は渋々庭園を後にした。

「さて…と。あなたはそんな所で何してるんですか？」

お嬢様2人を見送った後、ヴューイ様はクスクス笑いながらわたしが身を潜める植え込みを覗き込んできた。

「え～っと……ちょっと休憩……？」

転がった姿を見つかってわたしはしどろもどろ。

「こんな所で休憩していると誰かに襲われますよ」

「おそ……！？」

クスクス笑うヴューイ様の言葉にわたしはビックリして勢いよく立ち上がった。

「若いお嬢さんが覗きなんてあまり良い趣味とは言えませんね」

「覗きなんてしてません。休憩してたら声がしたのでちょっと様子を見てだけです」

「それを覗きって言うんですよ」
衣服に付いた草を払い落としながらわたしは少し睨むとヴューイ様はわたしの髪についていた草を取ってくれた。
「あ…ありがとうございます」
何かヴューイ様の前だと調子が狂うわ……。
赤くなった顔を見られない様に俯いてわたしはヴューイ様にお礼を言った。
「それでどうしてこんなところで休憩してたんですか？」
「それは……」
ヴューイ様の問いに思わずわたしは口籠もる。
どうしよう。王宮探検のあげく、疲れて休憩してましたなんて言えない……。
俯いたまま言い訳を考えるわたしの顔をヴューイ様が覗き込んできた。
「わたしに言えない事なんですか？」
「……いえ、そう言うワケじゃ……」
前にも思ったけどヴューイ様は顔近付け過ぎっっ！

息がかかる程の距離のヴューイ様に一層、顔が赤くなるのを感じわたしは少し離れようとした。

「理由を言うまで逃がしませんよ」

慌てて離れようとするわたしの腕をヴューイ様が捕まえる。

わたしたちの状態を知らない人が見ればラブシーンに間違い兼ねない。

「は、離してください！」

「理由を教えてくれたら離します」

焦るわたしにヴューイ様はに悪戯ぽい微笑みを浮かべてる。

「……わかりました。離してくれたら言いますから…」

わたしは諦めた様に特大のため息をつくとヴューイ様はニッコリ笑いながら解放してくれた。

「話しますけど…笑わないでくださいね？実は……」

やっと自由になって少しヴューイ様から離れるとわたしは理由を話し始める。

わたしの話を聞く間、ヴューイ様の肩は小刻みに揺れていた。

……一応、笑わない努力はしてくれてるのね……。

「ルイーゼさんは個性的な方ですね」
「……それって変り者って事ですよね……？」
未だに肩を震わせるヴューイ様を少し睨みながらわたしは言った。
「これでも誉めてるつもりなんですけど」
「それは誉め言葉じゃないですよ」
「他の人と違う事は悪い事じゃありませんよ」
睨むわたしにヴューイ様は優しく微笑みかけてくる。
「……素直に誉め言葉として受けときます。ありがとうございます」
「ルイーゼさんは可愛い人ですね」
「は……？」
突然の聞き慣れない言葉にビックリするわたしにヴューイ様は更にとんでもない言葉を口にした。
「あなたに興味を持ちました。あなたが王宮にいる間、わたしの恋人になりませんか？」
「お断りします！」
「……即答ですか。理由は？」

即答するわたしにヴューイ様は少し苦笑しながら尋ねる。

「だってわたしヴューイ様の事好きじゃありませんから」

恋人になんかなったら王宮中から好奇や嫉妬の眼で見られるに決まってるもの。

「はっきり言いますね。わたしの誘いを断った方はあなたが初めてですよ」

断られたにも関わらずヴューイ様は何故か楽しそうに言った。

そりゃ、それだけの容姿だもん。誘いを断るお嬢様方なんていないでしょうね。

「では、ちょっと賭けをしませんか？」

「賭け？」

「あなたが王宮にいる間にわたしの事が好きになったらわたしの勝ち。もし最後まで好きにならなったらあなたの望みを何でも叶えてあげるって言う簡単な賭けです」

悪戯ぽい微笑みを浮かべながらヴューイ様のとんでもない提案をする。

「そっ、そんな馬鹿げた賭けなんてしません！」

「勝つ自信がないんですか？」

怒鳴るわたしにからかう様にヴューイ様は言った。

「そんな事ありません！」

「じゃ、決まりですね」

「なっっっ！？」

「今から賭けの始まりですよ。遠慮なくあなたを口説いていきますから覚悟してくださいね」

陸に上がった魚の様に口をパクパクしているわたしにヴューイ様はクスクス笑いながら楽しそうに言った。

「わたしヤルだなんて……」

「さて、わたしは少し用事があるのでこれで失礼しますね」

尚も抵抗しようとするわたしの言葉を遮り、ヴューイ様はニッコリ微笑みながらわたしの手を取ると手の甲に優しく口付けを落とした。

「！！」

「では、また後ほど」

驚き過ぎて言葉もでないわたしにそう言うとヴューイ様はその姿を王宮の中にゆっくりと消していった。

そして、庭園に1人残されたわたしは為す術もなく呆然と立ち尽くしていた。

第6章

ヴューイ様との賭けの話は数日であっという間に王宮中に流れた。
いや、正確にはヴューイ様がワザと王宮中に流したのだけど……。
「だって賭けの間に他のお嬢様方に誘われても困りますからね」
賭けをバラされ、抗議するわたしにヴューイ様は悪びれた様子もなく微笑んだ。
やっぱりあの時点でキッパリ断っておけばよかった……。
微笑むヴューイ様を尻目にわたしは深く深く後悔した。
賭けの話が広まった事を全く知らずにいたわたしが部屋から出るたびに王宮中の女性方の向ける視線が痛い事、痛い事。
たまたま出会ったソフィーナに賭けの話が広まった事を教えてもらってわたしは王宮中の視線のワケをやっと理解した。
「賭けがバレて何か不都合でもありますか？」
「あるに決まってるじゃないですか！」
優しい微笑みを向けるヴューイ様にわたしは怒り心頭で言った。
「どうして？」

「わたしは姫巫女候補様の侍女。わたしが目立った行動をとればアヴィス様の妨げになります」

「それは大丈夫ですよ。アヴィス嬢はかなり優秀な様ですから」

「〜〜〜〜」

アヴィスが優秀な事は姉であるわたしが1番良くわかってる。

アヴィスの妨げになる事を理由に賭けを無効にしようとしたわたしの目論見は儚くも消え失せた。

「賭けの無効はなしですよ？」

バレてるし……。

わたしの目論見を見透かした様にヴューイ様がクスクス笑う。

「そんな事より部屋に帰らなくて大丈夫なんですか？そろそろ試練が終わる時間でしょう？」

ヴューイ様の言葉に落胆しつつ、窓に視線を向ければ既に茜色の夕暮れ空が広がっていた。

「あ！早く戻らないと」

「では、一緒に行きましょう」

「あの…アヴィス様に何か用事でも？」

一緒に歩き出すヴューイ様にわたしはおずおずと尋ねる。

「ルイーゼさんはまだ知らないんですね。この間、襲われた事により護衛がいないアヴィス嬢の為にわたしが試練の期間だけ護衛するように命じられたんですよ」

「えっっ！？」

「これで試練の期間中はずっと一緒にいられますね」

驚きのあまり歩みを止めるわたしにヴューイ様はニッコリ微笑んむ。

「…なんで今更……？」

わたしたちが襲われたのはもう随分前の事。

その事すら記憶に薄れかけてる今更になって護衛の話が出てくるなんてどう考えてもおかしな話だわ。

「それはわたしが姫巫女様に進言申し上げたからですよ」

その場に怪訝そうな顔で考え込むわたしの手をとるとヴューイ様はゆっくりと歩き出した。

「何故そんな事を？」

ヴューイ様に手を引かれわたしもゆっくり歩き出す。

「あなたと一緒に居たかったから」

「は？」

「冗談ですよ」

「……」

わたしの反応を楽しそうに笑うヴューイ様をわたしは無言で睨む。

「この間の暴漢は姫巫女候補と知りながら何らかの目的であなたたちを襲ったのでしょう。ならば、皆の感心が薄れかけた今こそ再び動き出すんじゃないかと思いましてね」

「……」

確かに…あの暴漢は何らかの目的があってわたしたちを襲ったんだと思う。

でも、生まれて１９年、命を狙われる程に恨まれてる覚えはわたしも、ましてやアヴィスにもあるハズがない。

――と、なれば残る理由はただ１つよね。

アヴィスが姫巫女候補になった事……。

「はぁ……」

「大きなため息ですね」

憂鬱な気持ちを隠し切れず特大のため息をついたわたしの頭上で聞

き覚えのある声がした。

「えっ？……あ！」

びっくりして顔をあげるとクスクス笑いながらわたしの顔を見つめているヴューイ様……。

しかも、ヴューイ様の手はわたしの手をしっかりと握っている。

……忘れてた……。

わたしは先程のヴューイ様の言葉に考え込んでヴューイ様の存在を忘れていた。

「……その顔…もしかしてわたしの事忘れていました？」

「い…いえ…あの……手…手を離してください！」

ヴューイ様の言葉に焦るわたしははぐらかす様に手を引っ張った。

「誤魔化そうとしてもダメですよ。悪い子にはお仕置きしないとね」

手を引っ張るわたしにヴューイ様はニッコリ微笑むと掴んでいたわたしの手を強く自分の方に引き寄せた。

「え……？」

突然の出来事で抵抗するヒマもなくわたしはヴューイ様の腕の中に納まっていた。

「離してく……きゃっ！」

慌ててヴューイ様に抗議しようと顔を上げた瞬間、わたしの胸元に柔らかい何かが触れたのを感じた。

その感触に驚いて見開いたわたしの眼に映るのはヴューイ様の艶やかな漆黒の髪……。

今の状態を理解出来ずただ呆然としていたわたしの胸元に小さな痛みが走った。

「痛っっ！？」

「はい、お仕置き終了」

小さな悲鳴をあげるわたしに少し悪戯っぽく笑うとヴューイ様は耳元で楽しそうに囁いた。

「な…な、何するんですかっっ！！」

「だから…わたしの事忘れたお仕置きですよ。これで鏡を見るたびわたしの事を思い出すでしょ？」

真っ赤になって睨み付けるわたしにニッコリ微笑みヴューイ様は答える。

「お仕置きって……？」

「わたしのモノって言う証を付けただけですよ」

「わたしはヴューイ様のモノではありません！ヴューイ様の馬鹿！大っっ嫌い！」

ヴューイ様の言葉にわたしは更に顔が赤くなるのを感じ、そう怒鳴るとヴューイ様を押し退け1人アヴィスの待つ部屋に向かって走り出した。

「本当に可愛いい人ですね。ついつい苛めたくなりますよ」

わたしの後ろ姿を見送りながらヴューイがそんな事言ってるなんて知る由もなく……。

第7章

「あら、ルイーゼお姉様。お帰りなさい。何処に行ってたの？」

息を切らし部屋に戻ったわたしに既に帰っていたアヴィスが優しい微笑みを向ける。

「うん…ちょっと用事でね」

息を整えながら少し苦笑してわたしは答える。

何も知らないアヴィスに言えるワケがない。

ヴューイ様と噂になった上に証を付けられたなんて……。

「そう。お姉様少し調子が悪いの？何だか顔が赤い気がするけど？」

「そ、そうかしら…？」

心配そうなアヴィスに言われてわたしは近くにあった鏡を覗き込む。

鏡に映るわたしの顔はアヴィスの言う通り少し頬が赤い。

更に下に視線を向ければ服の胸元に小さな紅い跡がしっかり付いていた。

これ……キスマークっっ！？

しっかり付いている紅い跡を見てわたしは隠す様に手で押さえる。

―――コンコン。

「はい。どなたですか？」

ふいに部屋の扉がノックされアヴィスが返事をした。

「ヴューイです。少しお邪魔してよろしいですか？」

「げっ！！」

扉越しに聞こえるヴューイ様の声にわたしは思わずおかしな声を上げてしまった。

「ルイーゼお姉様……？」

「あ…あの…わたし…やっぱり調子悪いみたい。アヴィスやヴューイ様にうつしちゃ悪いから奥の部屋で休んでるわねっ！」

わたしの態度に不思議そうな表情をするアヴィスの返事を待たず、わたしは逃げる様に奥の部屋に飛びこんだ。

「ふぅ～…」

扉を閉めてやっと1人になったわたしは小さな部屋に置かれている質素なベッドに倒れ込む様に身体を預けた。

この部屋は姫巫女候補の世話をする侍女たちが使う部屋。

本来なら幾人かの侍女たちが使うのだけどアヴィスにはわたししか侍女が居ない為、わたしの部屋になっていた。

アヴィスの部屋では先程、別れたばかりのヴューイ様の声が微かにする。

……どうしよう。いくら変な事されたからって……ヴューイ様に馬鹿とか言ってしまった。

薄暗い部屋で少し冷静さを取り戻したわたしはベッドの中で頭を抱えた。

明日からヴューイ様がアヴィスの護衛をするのであれば嫌でも一緒に行動しなくちゃならない。

でも……馬鹿とか大嫌いとか言ってしまった手前、平気な顔でヴューイ様の側に居られないわ。

本当にどうしよう……出来ればこの部屋で試練が終わるまで引きこもりたいっ！

枕に顔を埋め、出来もしない事を考えながらわたしは眼を閉じた。

「…んんっ……」

それからどれくらい時が経っただろう。

わたしが再び眼を開けると薄暗い部屋は更に暗くなっており、窓か

らは銀色の月明かりが差し込んでいた。

「……考え過ぎちゃっていつの間にか寝てしまったのね」

自分の行動に少し呆れてつつベッドから身体を起こした。

結構寝てしまったから、当分寝れそうにはないし…ちょっと気分転換に外の空気でも吸ってこようかしら。

少し乱れた髪と衣服を整えながらわたしは音を立てない様にゆっくりと部屋を出る。

人気もなく、しんと静まり返っている庭園をわたしは1人歩いていた。

「綺麗な月…」

紫紺の夜空に綺麗な満月が優しい光を放って輝いている。

「姫巫女候補の試練が終わるまでどうやったら平穏に過ごせるのかしら」

満月を眺めながらわたしはため息をついて呟いた。

いくらアヴィスが優秀と言ってもこれ以上迷惑をかけたら支障がでるかもしれない。

このまま家に帰ってしまおうかしら…。

でも……そんな事したらお父様に叱られてしまうかも。

ううん。それどころか家に入れてもらえないかもしれないわ…。
暴漢の事もあるし……本当にどうしたらいいのかしら。
「誰かいるのか？」
月を眺め色々考えているわたしの背後で誰かの声がした。
声に驚き振り返るとそこには王宮の護衛らしき男が険しい顔で立っていた。
「そこで何している？」
「あ…わたし…」
護衛に咎めるように尋ねられ、わたしは思わず口籠もる。
「……怪しい女だな…」
「いえ、わたしは姫巫女候補のアヴィス様の侍女です」
「姫巫女候補の侍女…？あぁ、お前が噂の……」
護衛は何かに気付いた様にわたしへと好奇の眼差しを向けながらニヤリと笑う。
何かイヤな感じ……。
「……では、失礼します」

「おっと。待てよ」
少し睨み付けながらニヤニヤ笑う護衛の脇をすり抜けようとしたがわたしは護衛に腕を掴まれてしまう。
「離してください！」
「……ふーん。顔はお世辞にも可愛いとは言えねぇな。お前みたいのがどうやってヴューイ様に取り入ったんだ？」
怒るわたしをジロジロ見つめながら護衛が言う。
わたしが取り入ったですって！？
護衛の言葉にわたしの中の何かがキレた。
「護衛さん」
「ん……？」
「あまり悪ふざけが過ぎると……」
少し俯きそう言うとわたしは護衛が腰にぶら下げている剣を逆手に持ったまま一気に引き抜いた。
「うぐっっ！？」
小さく呻く護衛の首筋には鈍く光る剣が宛がわれている。

「痛い目にあいますよ？」

驚いた顔の護衛の顔をわたしは冷やかな眼差しで見つめる。

「この女ぁ……。上にお前の事を報告してやるからな！」

「……ご自由に。その代わりわたしもこの事を有りのまま報告させて頂きますから」

唸る様に言う護衛にわたしはニッコリ微笑んで答えた。

「うぅっ…！」

わたしの言葉に護衛は一瞬にして顔を真っ青にした。

侍女であるわたしにこんな醜態をさらした事が王宮中に知れたら護衛としてプライドはボロボロだものね。

最悪、護衛を辞めさせられる可能もあるし。

「……冗談ですよ」

わたしは少し苦笑しながら剣を護衛の腰にある鞘に戻す。

途端、真っ青な顔をした護衛はその場にペタンと座り込んだ。

「今後は女だと思って悪ふざけなされない事ですわ。では、失礼いたします」

護衛を見下ろしながらそう言うと庭園からゆっくりと立ち去さり自

室に戻る。

「ふぅ～…」

部屋に戻ったわたしは夜風で少し冷えた身体をベットに沈めるとため息を吐いた。

「結局、全然気分転換にならなったわ…」

少し苦笑すると先程の騒ぎで疲れたのか直ぐに睡魔が襲ってくる。

……もう、明日考えよ……。

悩むのも睡魔に抵抗するのも面倒になりわたしは布団を頭から被り静かに眼を閉じた……。

第8章

どんなに永久に朝が来ないように願っても皆平等に朝は訪れる。

それはわたしにも例外ではなく……。

「そろそろ起きなきゃ……」

頭から被った布団の中でわたしは朝が来た事を感じ鉛の様に重い心と身体を仕方なく動かした。

侍女としての仕事をすべく身支度を整えるとわたしは壁に掛かった鏡を覗き込む。

「酷い顔……」

鏡に映る自分の顔は何時もよりタップリ眠ったハズなのに心なしか顔色が良くないように見えた。

気持ちが憂鬱だと顔色まで悪くなるのかしら。

鏡に映る自分の顔の酷さに思わずわたしは苦笑してしまう。

———コンコン

「おはようございます。ルイーゼお姉様、体調は大丈夫？」

「おはよう。昨日よりは大分よくなったわ」

ノックと共に部屋に入ってきたアヴィスにわたしは笑顔で迎える。

「何だか昨日より顔色が良くないようだけど」

「本当に大丈夫よ。昨日タップリ睡眠をとったし。そんな事より早く試練に行く仕度しないとね」

心配そうに尋ねるアヴィスをわたしはごまかす様に朝の仕度を急かした。

「その事なんだけどね。今日の試練はお休みでその代わり午後から姫巫女様主催のお茶会があるの……それも出席者の侍女も同伴で……」

「えっ？侍女もなの？」

少し遠慮がちに言うアヴィスにわたしは驚いて尋ねる。

「……ええ。そうみたい。でもルイーゼお姉様の体調が悪いのならわたし……お断りしようかと思っているのよ」

「……」

姫巫女様主催のお茶会なら姫巫女候補であるアヴィスが断るなんて絶対ありえない。

この態度からしてわたしとヴューイ様の賭け話がアヴィスの耳にも入ったのね。

気を遣う様にわたしを見つめるアヴィスに小さくため息をつく。
「アヴィス、わたしなら大丈夫よ。お茶会に一緒に出席するわ」
「でも…」
「わたしの事は気にしないで。折角のお休みなんだからあなたはお茶会までゆっくりしてなさい」
「あ…後ね……わたしに護衛がいないからって今日からヴューイ様が護衛についてくれる事になったの」
「それは知ってるわ。昨日ヴューイ様にお会いした時に聞いたからね」
言いにくそうなアヴィスに出来る限り明るい声でわたしは答える。
「……そう。じゃ、わたし部屋にいるからお茶会までルイーゼお姉様もゆっくり休んでね」
わたしの言葉にアヴィスは少し考えてからそう言うと自分の部屋に帰って行った。
「アヴィス、心配かけてゴメンね」
アヴィスの出て行った扉を見つめながらわたしは呟いた。
「とりあえずお茶会まではヴューイ様と会う事はないわね。でも……1番の問題はお茶会だわ」

朝からヴューイ様に会わなくてすむ事にわたしはホッとしながら近くにあった椅子にゆっくりと腰を下ろす。

侍女も同伴なんてどう考えてもわたし目当てだとしか考えられない。

しかも姫巫女様主催となると絶対全員出席だもの。

お茶会の間、出席者の嫉妬と好奇の視線に晒されるかと思うとわたしは頭が痛くなった。

――――コンコン

1人苦悩するわたしの部屋の扉を誰かがノックした。

「……どなたですか？」

「おはようございます。ヴューイです」

「げっっ！」

午後のお茶会まで会わずにすむと思っていたわたしは突然のヴューイ様の訪問に変な声を上げてしまった。

「少しお邪魔してよろしいですか？」

わたしの奇声が聞こえたのかヴューイ様の声は少し笑いを含んでいる。

どうしよ。返事しちゃったから今更、居留守は使えないし……。

こうなったら用件だけ聞いたらさっさとお帰りいただこう。
わたしが渋々、扉を開けると優しい微笑みを浮かべてヴューイ様が色とりどりの花束を持って立っていた。
「おはようございます」
「……おはようございます。こんな朝早く何かご用ですか？」
「いえ。昨日アヴィス嬢からあなたが体調を崩したとお聞きしたのでお見舞いに来たんですよ」
作り笑いで招き入れるわたしにヴューイ様は微笑みを崩す事なく花束を差し出しながら部屋に入ってきた。
「あ、ありがとうございます。でも体調はもう大丈夫ですわ」
「まだ顔色が悪いようですね」
心配そうな表情のヴューイ様は戸惑いつつも花束を受け取るわたしの頬に手を添え、顔を近付けて来た。
「なっ何す……！？」
「……熱はないようですね」
顔を真っ赤にしながら怒鳴ろうとするわたしの額に自分の額を引っ付けてヴューイ様が言う。

「ね、ね、熱なんてありません。だから……早く離れてください！！」

「イヤ……って言ったらどうします？」

間近に見える綺麗な顔に爆発しそうなくらい心臓が暴れるのを感じ焦るわたしをヴューイ様がさっきとは打って変わって意地悪な笑みを浮かべて見つめていた。

「朝から悪ふざけはやめてください！」

「言ったハズですよ？あなたを遠慮なく口説くとね」

ヴューイ様は意地悪な笑みのままそう言うと頬に添えていた片手をわたしの腰に回し、もう片方の手でわたしの唇をゆっくりとなぞった。

「んっ……！」

「可愛い声出しますね」

唇をなぞる指先に反応して小さく声を上げるわたしの耳元でヴューイ様が艶めいた声で囁く。

「もう…放してください…」

その言葉に恥ずかしくなりわたしはヴューイ様の胸を押して逃げようするけど力が思うように入らない。

まるでヴューイ様に力が吸い取られてるみたいに……。

「昨日みたいに逃げないんですか？」

「……」

逃げたくても逃げられないんです！！

心の中で叫ぶけどその言葉を口にしたら何をされるかわからないのでわたしは無言でヴューイ様を睨み付けた。

「少し意地悪し過ぎましたね」

「ひゃ！？」

ヴューイ様はクスクスと笑いながらわたしの首筋に口づけを落とすと柔らかい感触を感じた身体がビクンと跳ねる。

「この続きはまた今度に……」

艶めいた声でそう囁くとヴューイ様は身体を離し、ゆっくりとわたしを椅子に座らせた。

「……何でこんな事ばかりするんですか？」

「それはあなたががあまりにも可愛いからですよ」

やっと離れられて少しホッとしながらわたしは再び睨み付けるがヴューイ様はニッコリと微笑む。

「そんなハズありません！昨夜だって護衛に……」

昨夜の護衛に言われた事を言いそうになりわたしは思わず手で口を押さえた。

「護衛？」

「……」

少し驚いた表情でヴューイ様は口を押さえていた手を掴むと黙り込むわたしを見つめる。

『お前みたいなのがどうやってヴューイ様に取り入ったんだ？』

容姿も性格も可愛くないのくらい自分が1番よく知ってるわ！

護衛の言葉が甦り、ヴューイ様の視線を避ける様にわたしは顔を背けた。

「昨夜何があったんですか？」

「…何もありません」

「……教えてくれないんですね……誰が何を言ったのかは知りませんがわたしにとってあなたはとても可愛い人だと思っていますよ」

視線を合わせる事なく答えるわたしにヴューイ様は少しため息を洩らすと掴んでいたわたしの手に口づけをした。

「ヴューイ様…！」

歯の浮く様な言葉をサラリと言うヴューイ様に顔を真っ赤にしながらわたしは慌てて掴まれていた手を引っ込める。

「本当に可愛い人ですね。あなたの顔色も良くなった事だし、そろそろ仕事に戻ります。またお茶会の時間に迎えに来るので準備しておいてくださいね」

クスクス笑いながらヴューイ様はそう言って扉の取っ手に手をかけた。

「……あの……ヴューイ様」

「何でしょう？」

「……お見舞いのお花ありがとうございました」

部屋を出て行こうとするヴューイ様にわたしはお礼を言った。

「喜んでいただけて良かったですよ。では、後ほど」

優しい微笑みを浮かべるとヴューイ様は静かに部屋を出て行った。

「……綺麗な花束……」

1人になった部屋でわたしはヴューイ様に貰った花束を見つめる。

『わたしにとってあなたはとても可愛い人ですよ』

先程のヴューイ様の言葉が頭の中でグルグル回り心臓が暴れ出すのを感じる。

……まさか……わたしヴューイ様を……？。

あ…ありえない！絶対ありえな～い！！

顔を真っ赤にしながら激しく首を振り、わたしは今考えた事を打ち消した。

「……バカな事を考えるよりそろそろアヴィスのお茶会の準備しなくちゃ」

振り過ぎてクラクラする頭を押さえ、大きなため息をつくとわたしはアヴィスの部屋に向かって歩き出した……。

第8章（後書き）

文章力無さ過ぎですいません（＜＿＞。）

第9章

麗らかな春の日差しが差し込む王宮の1室。

姫巫女様を含んだご令嬢たちが紅茶やお菓子をつまみながらお喋りを楽しんでいた。

その中にはこの前の宴でわたしを敵視していたイリアス様の姿も……。

……出来る限りイリアス様には近寄らないようにしよう。

他の侍女たちに紛れ、部屋の片隅に控えていたわたしはイリアス様の姿を見つけ思わず身体を潜めた。

「ルイーゼさん、何してるんですか？」

「え？……あ、別に……」

一緒に控えていたソフィーナが不思議そうな視線を向けたのでわたしは慌てて笑って誤魔化す。

「……？それにしてもヴューイ様すごい人気ですねぇ」

「……本当にね」

まだ不思議そうな表情をしながらもソフィーナは視線をヴューイ様に移した。

流石と言うかやっぱり言うか…。
護衛してるハズのヴューイ様はアヴィスから少し離れた場所でご令嬢たちに囲まれ少し困った様に微笑んでいた。
「そんなにヴューイ様が気になるのかしら？」
「……イリアス様……」
少し呆れ気味でヴューイ様を見つめるわたしの前にイリアス様と何人かのご令嬢たちが立っていた。
……ヤバイ……見つかった。
イリアス様は明らかに不機嫌な表情で周りにいたソフィーナ以外の侍女たちはわたしたちをいつの間にか遠巻きに見つめている。
「あなた、この前の宴でヴューイ様と話をしていた侍女よね？」
「……はい」
「ヴューイ様と賭けをしてるのも……あなた？」
「……」
イリアス様の質問にわたしは黙り込んでしまう。
「……そう。あなたみたいな目立ちたがりの侍女を持つとアヴィス嬢もさぞ大変でしょうね」

黙るわたしをイリアス様が冷たい表情で笑う。

――――クスクス

周りにいたご令嬢たちもバカにした様に笑い出す。

わたしは何も言い返せなかった。

侍女の立場でご令嬢のイリアス様に言い返すワケにいかないし、わたしのせいでアヴィスに迷惑をかけているのは本当の事だから…。

「あまり侍女のクセに目立ち過ぎない事ね。どうせヴューイ様も暇潰しであなたを誘っているのだから」

そんなの言われなくたってわかってるわ……。

イリアス様の言葉にわたしは少し胸が痛み、唇を噛んだ。

「ルイーゼさん……」

「大丈夫」

傍にいてくれるソフィーナの心配そうな声にわたしは慌てて笑顔を作る。

「お茶会楽しんでいるかしら？」

そんなわたしの肩に誰かが触れた。

「……姫巫女様……」

イリアス様とご令嬢たちの顔色がさっと青ざめ、慌てて姫巫女様に頭を下げた。

わたしたちも姫巫女様の登場に驚きつつ、深く頭を下げる。

「そんなに畏まらないで。せっかくの楽しいお茶会が台無しになってしまうわ」

わたしたちの態度に困った様にため息をついて姫巫女様が言う。

姫巫女様……それは無理な話です。

身分と偽ってなくても姫巫女様と話すなんて恐れ多い事。

同じ部屋にいる事すら普通ではあり得ないんだから……。

「あなたが今ヴューイと噂になってる侍女かしら？」

深く頭を下げるわたしに柔らかい微笑みを向けて姫巫女様が尋ねる。

「……はい」

姫巫女様に嘘や誤魔化しは言えないわ。

わたしは少し考えてから深く頭を下げたまま答えた。

「じゃ、あなたがわたくしのライバルなのね」

「ライバル……ですか…？」

姫巫女様の言葉の意味がわからずわたしは頭を上げ、少し首をかしげる。

「あら、知らなかった？わたくしもイリアス嬢と同じくヴューイの花嫁候補なのよ」

「えっ！？」

姫巫女を１０年務めればどんな相手でも思いのままのハズで姫巫女様が花嫁候補なら……もう決りよね…？

「大丈夫よ。わたくし姫巫女の特権は使わないから」

イリアス様と姫巫女様を見比べるわたしの心を見透かすようにクスクス笑う姫巫女様。

「……どうしてですか？」

「わたくしは幼い頃から誰にも負けないくらいヴューイの事が好きだったの。だからヴューイには特権など使わずにわたくしを選んでもらいたいのよ」

ヴューイ様の話をしながら微笑む姫巫女様は女のわたしから見てもとても可愛いらしく感じた。

……本当にヴューイ様が好きなんだなぁ。

「あの…わたし噂にはなっておりますが…ヴューイ様とは何の関係もありません」

少し俯きながらわたしは姫巫女様におずおずと言う。

ヴューイ様の行動にドキリとした事は何度もあるけど好きか？と聞かれたら正直、好きだとは言えないもの。

ヴューイ様だってわたしを本気で口説いてるとは思えないし……。

「フフ、ヴューイがあなたを気に入ったワケがわかった気がするわ」

わたしの言葉に姫巫女様は小さく笑うとご令嬢たちに囲まれてるヴューイ様に視線を向ける。

わたしも姫巫女様につられてヴューイ様を見るとその視線に気付いたのかご令嬢たちに何か言うとこっちに向かって歩いてきた。

「姫巫女様、イリアス嬢、ご機嫌いかがですか？」

「上々よ。楽しくお話しているし」

「ヴューイ様、こんにちは」

軽く会釈するヴューイ様に姫巫女様とイリアス様は挨拶をする。

「それはよかった。でもルイーゼさんをあまりイジメないでくださいね」

「あら？そんな事なくてよ。皆で仲良くお話していただけ。ねぇ、イリアス嬢？」

「は…はい、姫巫女様」
姫巫女様に同意を求められイリアス様は笑顔を少し引きつらせながら答える。
さっきあんなに皮肉言ってたクセに……。
「本当ですか？姫巫女様は昔からイジメっ子でしたからね。わたしもよくイジメられました」
「失礼ね。ヴューイをイジメた事なんてなくてよ。それにわたくし彼女を気に入ったからイジメるなんてしないわ」
イタズラっぽい眼で見つめるヴューイ様に少し口を尖らして姫巫女様が言う。
「え……？」
「姫巫女様ダメですよ。ルイーゼさんはわたしのモノなんですから」
姫巫女様の言葉に驚くわたしをヴューイ様が背後から抱きしめる。
「ヴ、ヴューイ様、離してください！」
ヴューイ様の腕の中で顔を真っ赤にさせながらわたしはジタバタ暴れる。
「2人とも本当に仲良しなのね」
「ちっ…違い……」

「そうですよ。だから盗らないでくださいね？」
否定しようとするわたしの言葉を遮るヴューイ様。
ヴューイ様に抱きしめられるわたしを冷たい笑みで見つめるイリアス様に冷や汗が流れた。
……眼が笑ってないですよ？イリアス様……。
「ヴューイがそんなに執着するなんて珍しわね」
わたしたちの様子を楽しそうに眺る姫巫女様がクスクス笑って言った。
「ええ、だって彼女はわたしを即答で振った強者ですからね」
「ヴューイ様！」
皆の前で何て事いうんですかっっ！
「まぁ！あなたを振るなんて勇気あるわね」
流石の姫巫女様でもヴューイ様の言葉には驚いたみたいでクスクス笑いを止め、わたしを見つめる。
「い、いえ…あの……えっと……」
姫巫女様に見つめられてわたしは口籠もり、思わず視線を逸らすと周りにいたご令嬢と侍女たちがチラチラこちらの様子をうかがって

いる。

……完全に聞かれたわね……。

部屋中の嫉妬の視線を感じわたしは頭が痛くなってきた。

「姫巫女様、そろそろお茶会も終了の時間でございます」

ふいに姫巫女様の後ろで控えていた王宮侍女がお茶会終了の時刻を伝える。

「あら、もうそんな時刻？名残惜しけれど仕方ないわね。皆さん、時間を共有出来てとても楽しかったわ。また機会があればお話しましょうね」

姫巫女様は皆に少し残念そうな顔で微笑むと部屋を退室して行った。

残ったのはヴューイ様に抱きしめられたままのわたしに嫉妬の視線を送るご令嬢様たちとイリアス様……。

「あの…いい加減離していただけませんか？」

「そうですね。アヴィス嬢を部屋までお送りしなくてたなりませんし」

痛いほどの視線を感じ、ため息をつくわたしにヴューイ様は素早くわたしのうなじに口づけを落として離れた。

「ヴューイ様！」

更に顔を真っ赤にしながら怒鳴るわたしをヴューイ様はクスクス笑う。

「……ヴューイ様、この後お父様がお食事をご一緒にどうかと申しておりました。ぜひ我が屋敷においで下さいませ」

わたしたちの様子に少し眉をひそめながらもニッコリ微笑むとイリアス様がわたしを押し退ける様にヴューイ様の腕に絡み付いた。

「せっかくのお誘いですがこの後アヴィス嬢の護衛が……」

「ヴューイ様、王宮内で危ない事などありませんわ。アヴィス様にはわたしが付いているから大丈夫です」

困った様に微笑み断ろうとするヴューイ様の言葉をわたしはニッコリ微笑みながら遮る。

「でも…」

「どうぞ、アヴィス様の事はお気になさらないでください。さぁ、アヴィス様。お部屋に戻りましょう」

「え、ええ、それでは失礼します」

他の姫巫女候補とお喋りしていたアヴィスを急かす。

「ルイーゼさん！」

ヴューイ様に呼び止められたけどわたしは聞こえないフリをして部屋を後にした。

「あれでよかったの？」

部屋に帰る途中アヴィスが後ろを気にしながらわたしに尋ねる。

「……これ以上イリアス様やご令嬢に睨まれたらたまらないわ」

少し苦笑しながらわたしはため息をついて答える。

「確かに皆のルイーゼお姉様を見る眼は尋常じゃなかったわね」

アヴィスが思い出した様にクスクス笑う。

……それにイリアス様と一緒のヴューイ様を見たくなかったし……。

ヴューイ様の腕に絡み付いたイリアス様を思い出して少し胸が痛んだ。

「……ルイーゼお姉様、ヴューイ様が好きなの？」

「は……？」

突然のアヴィスの質問にわたしは言葉を失う。

「だって…イリアス様と一緒にいるヴューイ様を見るの嫌だったでしょ？」

……何でわかったのかしら？

「そ、そんな事ないわ。ただこれ以上イリアス様に恨まれたくないだけよ。さぁ、早く部屋に戻りましょ！」

アヴィスに心を見透かされたみたいで焦ってそう言うとわたしは少し足速に部屋に向かった。

……わたしがヴューイ様が好きなワケないじゃない！

胸が痛むのはきっと何かの間違いよ。

ヴューイ様だってわたしとの事は1ヶ月だけの暇潰しなんだから……。

自分に言い聞かせる様に心でそう呟きながら……。

第１０章（前書き）

文章めちゃめちゃでゴメンナサイ！ゞ（｜｜。）

第１０章

皆が寝静まった深夜、満月の優しい光を浴びながらわたしはベッドの中で何度も寝返りをうっていた。

ルイーゼお姉様、ヴューイ様の事好きなの？

眠れないわたしの頭の中でアヴィスの言葉がグルグル回る。

そんなワケないじゃない……。

アヴィスの言葉を何度も心の中で否定するけどその度に何故か胸の奥がチクチク痛んだ。

小さい頃から男の子たちに混じって剣術や遊びをしてきたから恋愛なんてわたしには無縁だった。

初恋さえ、まだなわたしがヴューイ様に恋してるなんてわかるワケないじゃない。

ましてやヴューイ様にとってわたしはただの暇潰し……。

まるで出口のない迷路に入り込んだ気分。

「はぁ……」

王宮に来て何度ため息をついたかわからない。

「ノド渇いたな……」

ため息のつき過ぎたせいかノドが渇き、ベッドの脇に置いてある水差しに手を伸ばすけど水が出ない。

「あ…」

月明かりに水差しを照らすと中に水が入っていない事に気がつく。

ついてないわ。水を貰いに行こう。

心の中でボヤくとわたしはノロノロとベッドから身を起こし寝衣のままショールを羽織ると水差しを持って静かに部屋を出た。

春になったとは言うものの夜はまだ肌寒く、わたしはショールを羽織り直すと足早に廊下を歩く。

「ん…？」

月明かりが照らす人気ない廊下を歩いていると誰かが中庭にある噴水の縁に座っているのに気づいた。

誰かしら？

眼を凝らしてよく見てみれば、それは今1番わたしが会いたくない人……。

気づいた瞬間、わたしの心臓が暴れるのを感じ無意識に身体は回れ右していた。

「こんばんは」

そんなわたしの背中に艶っぽい声が響く。

……気づかれた。

はぁ…と、ため息をつくとわたしは仕方なく振り替える。

「こんばんは。ヴューイ様」

暴れる心臓を必死で落ち着かせ、わたしは作り笑いを浮かべてヴューイ様に挨拶する。

「こんな夜更けに何処に行くんですか？」

「ノドが渇いたので水を貰いに行くんです。ヴューイ様こそ、こんな所で何をされているんですか？」

月明かりに照らされたヴューイ様はとても美しくてわたしは俯いて尋ねる。

「わたしはイリアス嬢のお屋敷で晩餐と酒をご馳走になり、ちょっと酔ったので酔い醒まししているんです」

そう答えるヴューイ様の顔をチラリと見れば少し酔っているのか頬が赤い気がする。

やっぱり…イリアス様のお屋敷行ったんだ。

さっきまで暴れていたわたしの心臓がチクりと痛んだ。

「そう…なんですか。あ、あの…わたし、これで失礼します」

「ルイーゼさん。ちょっとお話しませんか？」

何だか居心地が悪くなって立ち去ろうとしたわたしにヴューイ様が笑って言った。

「えっ……？でも…」

「少しだけ…ね？」

水差しを抱きかかえた状態で戸惑っているわたしにヴューイ様はゆっくりと近寄ると優しくわたしの手を引いた。

手を引くヴューイ様の手は夜風に冷えたわたしの手を暖かく包み、わたしの心臓が再び暴れだす。

「こちらへお座りください。お姫様」

「……はい」

少し悪戯っぽく笑って促すヴューイ様にわたしが素直に噴水の縁に座ると自分もその隣に座る。

「月が綺麗ですね」

「……そうですね……あの…手、繋いだままなんですけど……」

紫紺の夜空に浮かぶ満月を見つめるヴューイ様に相槌を打ちつつ、

わたしの意識は未だ繋がれてる手に集中していた。

「嫌ですか？ルイーゼさんの手が冷たくて気持ちいいんですよ」

「なっっ！？」

一瞬、わたしの心臓が止まるかと思った。

だって……ヴューイ様はそう言うと繋いだままのわたしの手を少し赤くなってい自分の頬に押し当てたんだから……。

「気持ちいい」

酔ってるせいか紅い眼を少し細めながらわたしを見つめるヴューイ様の視線がやけに艶っぽい……。

冷えた手からヴューイ様の頬の体温が伝わり、わたしの頬まで熱くなる。

「ヴューイ様、離してください」

「そんなに焦らなくても賭けに勝つまではあなたを食べたりしませんから大丈夫ですよ」

何時もの何倍も艶っぽいヴューイ様に焦りを隠せないわたしにヴューイ様はクスクス笑った。

「た、食べ……っ！？きゃっ！」

「危ない！」

ヴューイ様の言葉にわたしは驚きのあまり繋いでいた手を振り払い、立ち上がろうとして自分の寝衣の裾を踏んづけてしまった。

———バッシャーン！！

支えようと伸ばしたヴューイ様の腕も虚しく、結果……わたしはバランスを崩しハデな水音を響かせて後方の噴水の中へ見事に飛び込んでしまった。

……季節は春先……いくら何でも水遊びには早すぎるわよね……。

自分のあまりに酷い失態に冷たい水の中で座り込み、わたしは苦笑した。

「何やっているんですか！？早く出ないと風邪を引きますよ！」

珍しく少し声を荒げてヴューイ様がわたしを噴水から引き上げてくれる。

「……ありがとうございます」

苦笑しながら全身水浸しの姿でお礼を言うわたしにヴューイ様は自分の外套でわたしの身体を包むと素早く抱きかかえて早足で歩きだした。

「ヴューイ様！？降ろしてください。ヴューイ様まで濡れてしまいます！」

「わたしが濡れるのは構いません。それより早く着替えないとあな

たが風邪引いてしまいます！」

そう言うとヴューイ様はわたしを抱きかかえる力を強める。

「わたしは大丈夫ですから。自分で歩いて帰れます！」

「あなたは少し黙った方がいいですね」

腕の中で暴れるわたしにヴューイ様が怒った様に軽く睨む。

……怖い……。

普段優しい微笑みを向けるヴューイ様とは違って少し怒った表情のヴューイ様には暴れるわたしをおとなしくさせるには十分の迫力があった。

「着きましたよ」

人気ない廊下を抜け、ヴューイ様はわたしを抱きかかえたまま見覚えのない扉を開けた。

「……ここは？」

「わたしの自室です。あなたの部屋より近かったのでこちらへ連れて来ました」

「えぇっ！？」

こんな状況とはいえ……女の子が深夜に男の人の部屋に入るのはかなりマズイのでは…？

「ここを使ってください」

「えっ……！」

突然、ヴューイ様はそう言ってわたしを降ろした。

……ここはバスルーム……？

ヴューイ様の外套に身を包んだまま、わたしは辺りを見渡す。

「あの…ヴューイ様。わたし、湯浴みなら自室で……」

「風邪を引く前に早く身体を暖めてください。あんまり聞き分けがないとわたしが脱がしますよ？」

尚も渋るわたしにヴューイ様が何時もの様にニッコリ微笑んで言う。

「結構です！」

「それは残念。では、ゆっくり身体を暖めてくださいね」

顔を真っ赤にして断るわたしにヴューイ様はクスクス笑いながらバスルームを出て行った。

やっと1人になりわたしはその場に座り込む。

どうしよ…こんな深夜にヴューイ様の部屋にお邪魔するなんて……

しかもこんな格好だし…。

「クシュンっっ！！」

ずぶ濡れの格好で座り込んでいたわたしは寒さでクシャミが出た。

……寒い……こうなったらサッサとお風呂入って部屋に帰ろう。

仕方なく冷えきった身体をゆっくり動かし、ずぶ濡れの寝衣と下着を脱ぐとわたしは溢れる程にお湯が注がれている浴槽にその身を沈める。

「気持ちいい…」

わたしの冷えきった身体をお湯がゆっくり暖めていく。

あれだけ酷い失態をしたんだからヴューイ様も呆れたかしらね。

ずぶ濡れの自分の姿を思い出し、わたしは苦笑してしまう。

――――コンコン。

「お邪魔致します」

ノックと共に初老くらいの侍女さんがお風呂場に入って来た。

「あの…？」

「あなたがルイーゼさんね？」

「はい」

浴槽の中で戸惑うわたしに初老の侍女さんは優しい微笑みを浮べる。
「心配しなくていいですよ。わたしはヴューイ様の侍女マリノアと言います。ヴューイ様にあなたの寝衣をお渡しするように言われて来たの」
「あ…すいません。こんな深夜にマリノアさんにまでご迷惑おかけしてしまって…」
「迷惑なんて思ってないわ。最近ヴューイ様から色々あなたの事聞いていたからわたしも1度会ってみたかったもの」
クスクス笑いながらマリノアさんは着替えの寝衣を棚の上に置く。
「色々…ですか？」
「ええ。自分の誘いを一蹴した面白い侍女さんが王宮に来たってヴューイ様、楽しそうにお話していたわ」
「面白い侍女ですか…」
マリノアさんの言葉にわたしは思わず苦笑してしまう。
「そろそろお風呂から上がった方がいいわ。あまり暖まっていると今度はのぼせてしまうわよ」
苦笑するわたしにマリノアさんはバスタオルを差し出す。
お風呂から上がったわたしはバスタオルを受け取るとマリノアさんに背を向けて身体を拭き、棚にあった寝衣に着替えた。

「本当にすいませんでした」

「気にしなくていいのよ。それより髪を梳いてあげるわ」

寝衣に着替えわたしは深く頭を下げるとマリノアさんは優しい微笑みを向けてわたしを椅子へと促す。

「綺麗な髪しているわね」

「そんな事ないですよ。暇さえあれば剣術ばかりで全然手入れしてないですから」

「まぁ、ルイーゼさんはお転婆さんなのね」

丁寧にわたしの髪を梳いてくれるマリノアさんのクスクス笑いを聞きながらわたしは急に眠くなり、少し眼を閉じた。

気持ちいい。人に髪を梳いて貰うなんて何年ぶりかしら。幼い頃お母様に梳いて貰って以来かも……。

ボンヤリそう思いながら屋敷で待っているお母様の笑顔が頭に浮かぶ。

「あら…？眠たくなったのかしら。きっと疲れたのね。少しなら寝ても大丈夫よ」

眼を閉じたわたしに気づいたマリノアさんはそう言うとわたしの頭を優しく撫でた。

少しだけ…少しだけなら大丈夫よね……？

「ありがとうございます……」

眼を閉じたまま少し微笑むとわたしはゆっくりと意識を暗い闇の中に手放した……。

第11章（前書き）

更新カメですいません（ノд＞。）　。。ちょいスランプ中なのでじっくり悩みつつ話を進めていきたいと思っておりますm（｜　｜；）m

第11章

「うぅ…ん…」

誰かが優しくわたしの頭を撫でてくれている。

気持ちいい……これは夢……？

撫でられてる感覚にわたしは少し微笑む。

暖かい手…。

幼い頃、よくこんな風にお母様に撫でて貰ったな。

とても優しく微笑んで撫でてくれるお母様の手がわたしは大好きだった。

「…お母様…」

わたしは撫でくれる暖かい手を自分の頬に引き寄せる。

「ルイーゼさん、そろそろ起きませんか？」

……ん？ルイーゼさん…？

「お母様…？」

わたしは手を引き寄せたまま薄らと眼を開け、お母様を呼ぶ。

「残念ながらわたしはルイーゼさんのお母様じゃありませんよ」
寝ぼけ眼のわたしの前には何時見ても美しいヴューイ様の顔……。
「えっっ！？」
「おはようございます」
驚いてベッドから飛び起きるわたしにヴューイ様はクスクス笑いながら挨拶をする。
「ど……どうしてわたしの部屋に……！？」
「ここはわたしの部屋ですよ。昨日の夜の事忘れたんですか？」
「昨日の夜…？……あっ！」
思い出した！
昨日……ヴューイ様の部屋でお風呂を借りた上にマリノアさんに髪を梳いて貰ってた途中で寝ちゃって……。
「思い出しました？」
「あの…ご迷惑おかけしました」
昨日の醜態を思い出したわたしは俯きながらヴューイ様に謝罪する。
「迷惑なんて思ってませんよ。わたしの方が迷惑をかけてしまいま

したね。すいません」

「いえっ！わたしの不注意で噴水に落ちてしまって……」

昨日の醜態を思い出しただけで恥ずかしくなり、わたしは真っ赤になった顔を隠す様に俯いた。

「噴水に落ちた時はビックリしましたけどね。あなたの可愛い寝顔が見れたのでわたしにとっては役得でしたよ」

「ね、寝顔！？」

「そろそろ起こそうと思って頭を撫でたらニッコリ微笑んで本当に可愛いかったですよ」

クスクス笑いヴューイ様はわたしの顔を覗き込む。

「わっ忘れてください！ヴューイ様の記憶から抹消してください！！」

「それは無理ですよ。あまりにも可愛い過ぎましたから」

ヴューイ様は更に顔を真っ赤にするわたしの髪を一筋救い上げると優しく口づけを落とした。

「もぅ…からかわないでください」

「からかうなんて心外ですね。わたしは何時も本気で言ってるんですよ？」

そう言ってヴューイ様は恥ずかしくて俯くわたしの顎に指を絡めて優しく上を向かせる。

視線をヴューイ様に向ければヴューイ様の艶めく視線と絡まり、わたしの心臓が信じられない程の早さで暴れ出した。

「わかりましたから……離れてください」

「ルイーゼさん、わたしが本気だって信じてないでしょう？」

暴れ出す心臓を必死で宥めながら言葉を絞り出すわたしの耳元でヴューイ様は囁いた。

信じろって方が無理でしょ？

心の中ではそう思っても至近距離のヴューイ様に言葉が喉に張りついた様に声すら出ない。

「どれ程わたしが本気なのか身体に教えてあげましょうか？」

「…離してください…わたし、帰らないと…」

とんでもない言葉にわたしは顔を背け、逃げようとするけど顎に絡ってるヴューイ様の指がそれを許さない。

「ルイーゼさん」

わたしの名前を呼ぶヴューイ様の甘い声、艶っぽい真紅の眼……全てがわたしの頭をクラクラさせる。

――ルイーゼお姉様はヴューイ様の事好きなの？――

ふいにアヴィスに聞かれた言葉がクラクラする頭の中で響いた。

わたし…わたし、ヴューイ様の事…好き…なの…？

「ルイーゼさん、そんな無防備な顔しないでください。キスしたくなりますから」

思い悩むわたしの耳元でヴューイ様が甘い声で囁いた。

「えっっ！？」

「冗談ですよ。それより早く着替えた方がいいですね。そろそろ夜が明けますよ」

驚いた顔のわたしにヴューイ様は悪戯っぽい微笑みを浮かべると顎に絡めていた指を離した。

「は…い……」

やっと解放された安堵感にため息混じりに返事するわたしを見つめながらヴューイ様はクスクス笑うと扉の側に移動する。

「マリノア、扉の外にいるんでしょう？入って来て下さい」

――――ガチャ

「失礼いたします。ルイーゼさんの衣服を持ってまりました。」

扉を開けるヴューイ様にマリノアさんは驚く様子もなく、ニッコリと微笑んで部屋に入ってきた。

「盗み聞きなんて悪趣味ですね」

「何の事でしょうか？さぁ、ルイーゼさん、これに着替えて……あら？」

少し苦笑するヴューイ様を余所にわたしに衣服を渡そうと手を触った瞬間、マリノアさんの表情が曇った。

「あの……？マリノ……」

「あなた…熱があるんじゃない？」

マリノアさんは曇った表情のままわたしの額にてを当てた。

「え……？」

「やっぱり…熱があるわ。きっとこんな時期に水遊びしたのが原因ね」

驚くわたしの額と自分の額の熱を比べながら少しため息をついてマリノアさん言った。

「……すいません……」

「とにかく風邪を引いたルイーゼさんをこのままアヴィス様のお部屋に返すワケにはいかないわ。当分はこの部屋で安静にしていなさい」

額に当てていた手で謝るわたしの頭をゆっくりと撫でながらマリノアさんが言った。

「それは困ります！」

「どうしてかしら？」

「アヴィス…様にはわたししか侍女が居ません。わたしがいなければアヴィス様のお世話をする人間が居なくなってしまいます」

優しく尋ねるマリノアさんにわたしは少し俯いて答える。

「そうだったの。じゃ、あなたが治るまでわたしがアヴィス様のお世話をしてあげるわ。ヴューイ様もそれで宜しいですね？」

「わたしは全然構いませんよ。ルイーゼさんに風邪を引かしてしまったのはわたしのせいなのですから」

「そんな…！これ以上ヴューイ様やマリノアさんにご迷惑おかけするワケにはいきません」

そう言って慌ててベッドから立ち上がろうとするわたしの肩をマリノアさんが静かに掴んだ。

「ルイーゼさん、あなたが今1番迷惑をかけてはダメなのはどなたかしら？」

「……それは……」

「試練を受けているこの大事な時期にあなたがアヴィス様に風邪をうつすワケにはいかないでしょう？」

口籠もるわたしの背中をゆっくり撫でながらマリノアさんは子供に言い聞かす様に優しく言った。

「……はい」

「心配しなくても大丈夫よ。わたしがちゃんとアヴィス様のお世話するからね」

マリノアさんはニッコリと微笑むとわたしをベッドに寝かし付ける。

「また様子を見に来ますからね。あなたは何も心配せずにゆっくり休んで風邪を治しなさい」

「ありがとうございます」

お礼を言うわたしの頭をマリノアさんは優しく撫でてくれた。

「夜が明けたら王宮の医師に診て貰いますからルイーゼさんはそれまでは少し眠った方がいいですね」

「あの…ヴューイ様。お願いがあるんですが…」

ベッドの傍らに座ってわたしの手を握るヴューイ様にわたしはおずおずと言った。

「何でしょう？」

「わたしがヴューイ様のお部屋で寝込んでしまった事は誰にも言わないでくださいませんか？」

「わかりました。診てもらう医師にも他の侍女たちにも他言しないように言っておきます」

優しく微笑みヴューイ様はお願いを快諾してくれてわたしはホッとする。

「ゆっくり休んでくださいね。わたしは隣の部屋にいますから何かあったら呼んでください」

「ありがとうございます」

「では、おやすみなさい」

ヴューイ様はクスリと笑うと満面の笑みを浮かべてお礼を言うわたしの額に優しい口づけを落とした。

「ヴューイ様！」

「おやすみのキスですよ。額より唇が良かったですか？」

額を手で押さえ真っ赤になって驚くわたしにヴューイ様は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「どっちも遠慮いたします！」

「ヴューイ様、病人であるルイーゼさんをからかってはいけませんよ。さぁ、失礼いたしましょう？」

わたしたちのやり取りを見てクスクス笑いながらそう言うとマリノアさんはヴューイ様を急かし扉の方に歩きだした。

「マリノアさん、アヴィス様の事よろしくお願いします」

「任せてちょうだい」

マリノアさんは少し微笑んでからヴューイ様と共に部屋を出て行った。

1人になり静寂が訪れる部屋のベッドに横たわったままわたしは大きなため息を洩らした。

何時もは風邪なんて引いた事ないのにこんな事になるなんて……。

「とにかく早く治さなきゃね」

自分に言い聞かす様にそう言うとわたしは布団を被り直し、ゆっくりと眼を閉じた……。

第１２章（前書き）

かなり遅くなってすいませんでした（＜＿＞。）
間違って小説を消してしまったり携帯を水没させたりとアクシデント続きで……
…自業自得ですが……（；＾＿＾
皆様に楽しく読んで頂けたら幸いです。

第12章

「んっ……眩し……い…」

窓から差し込む光りに顔を顰めながらわたしは再び眼を覚ました。

クラクラする頭を押さえ辺りを見渡せばあんなに薄暗かった部屋は今や太陽の光りに満ち溢れている。

「イタタ…風邪引いたらこんなに辛いなんてね……」

少し動かすだけで悲鳴をあげる身体を恨めしく思いつつ、わたしはため息混じりに呟く。

幼い頃から滅多に病気なんてかかった事のないわたしには風邪の辛さは初めての経験だった。

……アヴィス、大丈夫かしら…？

なるべく身体を動かさない様に寝転び、窓越しに見える青空をぼんやり見つめながらわたしはアヴィスの事を考える。

――――――コンコン

「ルイーゼさん、ヴューイです。医師を連れて来たのですが起きていますか？」

「はい、起きています。どうぞお入りください」

扉越しに聞こえるヴューイ様の声に返事をするとわたしは身体が痛むのを我慢しながらゆっくりと身体を起こした。

「失礼します。ルイーゼさん、寝てなくてはダメじゃないですか」

扉を開けた途端、身体を起こしているわたしを見てヴューイ様の顔が曇る。

「これくらい大丈夫です」

「ダメですよ。風邪は万病の元なんですから」

少し苦笑するわたしに近寄り、ヴューイ様はそう言うと横になる様に促した。

「こいつが今回の遊び相手か？」

ヴューイ様の背後で不機嫌そうな声が響く。

わたしがベッドに横になりながら声のする方に視線を向けると扉の側で仏頂面の男の人が立っていた。

誰かしら？

「ファイン、ルイーゼさんは遊び相手じゃありませんよ」

「どうせ遊ぶならこんな山猿じゃなくても良いだろうに」

ヴューイ様にファインと呼ばれた男の人は悪びれる様子もなく呟いた。

ファイン様は肩までの紫紺の髪を無造作に束ね、ヴューイ様程ではないけどかなり綺麗な顔立ちをしている。

但し、仏頂面さえしていなければ……ね。

「あの…この方は？」

「この人は王宮医師のファイン。口は悪いですが腕は確かですよ」

「王宮医師であるオレがお前の様な山猿を診てやる事などあり得ないんだがヴューイの頼みだから仕方なく診てやる。有り難く思えよ」

ファイン様は偉そうにそう言うと手に持っていた大きなカバンをテーブルの上にドッカリと置いた。

……誰が山猿ですって……？

「ファイン、ルイーゼさんに失礼な事を言わないでください」

「……ヴューイ様」

ファイン様を窘めるヴューイ様の服の袖をわたしは軽く引っ張る。

「どうされました？」

「ヴューイ様には申し訳ありませんが……わたしこんな『ヤブ』医師様に診て頂きたくありませんわ」

「なっっ！？無礼な！」

わたしの『ヤブ』発言にファイン様は不機嫌な顔を更に曇らせてわたしを睨み付ける。

「あら？人間と山猿の区別のつかない医師様を『ヤブ』と言って何が悪いんですか？」

「ぐっ……！？」

「ファインの負けですね。ルイーゼさんに非礼を謝りなさい」

言葉に詰まるファイン様をヴューイ様はクスクス笑う。

「誰がこんな山猿に……！」

「……ファイン、それ以上言うと本気で怒りますよ？」

尚も悪態をつこうとするファイン様にヴューイ様はニッコリと笑って言った。

……怒って言われるより怖いかも……。

「チッ！わかったよ！」

ヴューイ様の言葉にファイン様は小さく舌打ちするとわたしたちに背を向けてしまった。

「ルイーゼさんもご機嫌を直してくださいね。このまま風邪が長引くとあなたも困るでしょ？」

……確かにこのまま風邪が長引けばアヴィスの世話が出来ないしヴューイ様にも多大なる迷惑をかけてしまうわ。

「……ヴューイ様、すいませんでした」

「あなたが謝る必要はありませんよ。ファイン、早くルイーゼさんを診てあげてください」

ニッコリ微笑みながらヴューイ様はわたしの頭を撫でると背を向けているファイン様に声をかける。

「……仕方ないな……」

「では、わたしは診察の邪魔にならない様に隣の部屋で待っていますね。ファイン頼みましたよ」

大きなため息をつくファイン様の背中を軽く叩くとヴューイ様は部屋から姿を消した。

部屋に残ったのは相変わらず仏頂面のファイン様とわたしの2人きり……。

ハッキリ言ってかなり気まずんですけど……。

「おい、口を開けろ」

「は……？」

ベッドの中でこの状態をどうすべきか考えているわたしに突然、ファイン様が言った。

「何を間抜け面している。診てやるから早く口を開けろ」

「……」

……怒っちゃダメ……怒っちゃダメ……。

ファイン様の言葉にムッとしつつもこれ以上ヴューイ様に迷惑をかけるワケもいかないのでわたしは無言で口を開けた。

「寝不足と過労からくるただの風邪だな」

気まずい雰囲気のまま、ひとしきり診察した後でファイン様が仏頂面で言った。

「……寝不足と過労……」

そう言えば王宮に来てから熟睡した記憶がないわ。

オマケにヴューイ様のお蔭で色々と苦労が絶えないし……。

「数日ほど薬を飲んで寝てれば直ぐに良くなるだろう」

「わかりました。ファイン様ありがとうございます」

「礼ならオレじゃなくヴューイに言うんだな」

わたしは素直にお礼を言うけどファイン様は素っ気ない。

「そんな事わかってます」

「ならいいが。用も済んだしオレは帰らしてもらうぞ」

「はい？でも、ヴューイ様が…」

「アイツにはお前から結果を伝えるんだな。オレは忙しいんだ」

うんざりした様に顔しかめてファイン様が言った。

「わ、わかりました」

「薬は誰かに後で届けさせる。苦い薬をな」

「……苦い薬……！？」

滅多に飲まないから薬はかなり苦手。

ましてや苦い薬なんて最悪だわ……。

わたしの慌てる顔を見てファイン様は少し意地悪く笑うとテーブルにあった大きなカバンを持ち、扉に近づく。

「じゃ、な。ちゃんと飲めよ？」

そう言うとファイン様は扉に姿を消した。

「……ヤブ医師め……」

ファイン様が消えた扉に向かってわたしは小さく悪態をついた。

――――コンコン

「失礼します。……あら？ファイン様が来ていると聞いていたけど？」

ノックと共に手にトレーを持ったマリノアさんが部屋に入ってきた。

「マリノアさん！」

「体調は大丈夫？」

「いえ、まだ少しダルいです。あの…アヴィス様の様子はどうでしたか？」

「アヴィス様は大丈夫よ。あなたの事をとても心配されていたわ」

持っていたトレーをテーブルに置くとマリノアさんは優しくわたしの頭を撫でてくれる。

「マリノアさん。ご迷惑かけてすいません」

「病人がそんな事を考えなくて良いのよ。それよりファイン様は？」

ニッコリと微笑みマリノアさんは部屋を見回しながら尋ねる。

「ファイン様はわたしを診た後、忙しいからって直ぐにお帰りにな

られました」

「そう、ファイン様らしいわね」

わたしの言葉にマリノアさんは少し苦笑した。

「ルイーゼさん、お腹減ってない？昨日の夜から何も食べてないでしょ？」

「あ……！」

そう言えば昨日から何も口にしていないわ。

グゥゥゥ……。

何も食べていない事に気づいた途端、正直なわたしのお腹が自己主張をし出した。

「やっぱりお腹空いているのね。温かいスープを持って来たから食べましょうか？」

お腹の音を聞かれた事が恥ずかしくて顔を真っ赤になったわたしの身体をゆっくりと起こしてマリノアさんはクスクス笑う。

「……すいません……」

「お腹が空くのは当たり前よ。しっかり食べて早く良くならないとね」

マリノアさんは謝るわたしの前にトレーを置きスープを勧める。

「美味しい…」

温かいスープをゆっくりと口に運ぶととても美味しくて何だかホッとして気持ちになる。

「よかった。たくさん食べて眠ったらきっと直ぐに良くなるわよ」

「はい。ありがとうございます。あの…ヴューイ様は？」

スープを食べながらいつまでも姿を現さないヴューイ様の事が気になってマリノアさんに尋ねてみた。

「ああ、ヴューイ様なら姫巫女様に呼ばれてわたしと入れ違いにお出掛けになられたの」

……姫巫女様に……。

姫巫女様の名前が出た途端、わたしの心臓がチクりと痛んだ。

「そう…ですか」

「そんな顔をしなくてもヴューイ様は直ぐにお帰りになるわ」

「えっ！？」

わたしの顔を覗き込む様に見つめるとマリノアさんはまたクスクス笑う。

そんな顔ってわたしどんな顔してたのかしら…？

「変な顔をしてました？」

「いいえ、ちょっと寂しそうな表情だったわよ」

「そっ！そんな事……」

「違ったかしら。ごめんなさい」

慌てて否定するわたしにマリノアさんは少し悪戯っぽく微みかける。

寂しそうなんて……あり得ない！

べ、別にヴューイ様がいなくても寂しくなんて……。

頭の中で否定しながらわたしはスープを食べる。

「ご馳走様でした」

「あら？もういいの？」

「はい。とっても美味しかったです」

途中から味なんてわからなかったけど……。

少し苦笑しながらわたしは食べ終わったお皿をマリノアさんに渡してお礼を言う。

「そう。じゃ、その内ファイン様から薬が届くと思うからそれまでゆっくりと休みなさいね」

「……薬……」

ヴューイ様の事ですっかり苦い薬の事を忘れていたわたしは顔を顰める。

「どうしたの？」

「いえ……ちょっと薬が苦手で……」

「ルイーゼさんって子供みたいね」

顔を顰めるて答えるわたしにマリノアさんはクスクス笑う。

「だって、ただでさえ薬が苦手なのにファイン様が苦い薬を届けるって言ってたんですもん」

「あらあら、ファイン様ったら仕方ないわね。まだ戻るには時間があるからわたしがファイン様の所に行って苦くない薬をお願いして来てあげるわ」

「本当ですか？」

「ええ。だから薬が届くまでは良い子でおとなしく寝ていなさいね？」

パッと顔を輝かせるわたしにマリノアさんは優しく頭を撫でてくれる。

まるで子供をあやす様なマリノアさんの仕草に少し照れながらわたしはベッドに横になった。

「ありがとうございます」

マリノアさんに微笑み返すとわたしはゆっくりと瞼を閉じた。

「ゆっくりとおやすみなさい」

満たされたお腹とマリノアさんの優しい声にわたしは安心してゆっくり、ゆっくりと静かな眠りの中に意識を落として行った……。

第13章

「はぁー…」

もうこの部屋に来て…ううん…この王宮に来て何度ため息を吐いたかしら。

差し込む暖かい日差しに少し眼を細めながらわたしは1人、窓際で外を眺めていた。

寝込んだあの日からわたしはマリノアさんの看病ですぐに風邪は良くなった。

早くでも仕事に戻りたいと願うわたしにマリノアさんとヴューイ様は完全に風邪が治るまではと言って、もう5日もアヴィスの所に帰してもらえない。

……2人とも心配性過ぎるのよ。姫巫女の最終試験まで少ししか時間がないに……。

うんざりとした表情を浮かべ、わたしは再びため息を洩らした。

「そんなにため息ばかりだと幸せが逃げて行きますよ？」

「ヴューイ様…！？」

突然の笑いを含んだ声に驚いて振り向くと大きな箱を持ったヴューイ様が微笑みながら立っていた。

「何度もノックしたんですが返事がなかったので勝手に入らせてもらいました」

「あ…すいません。少し考え事をしてたので…それより何かあったんですか？」

ヴューイ様は今の時間はまだ仕事中のハズ。

この時間に来るなんて何かあったとしか思えない。

ヴューイ様は手に持っていた箱をテーブルに置きながら少し困った様に微笑んだ。

「実は…姫巫女が今夜、姫巫女候補たちの労をねぎらうと言う名目で仮面舞踏会を開くと言い出したんです」

「仮面舞踏会！？」

華やかな舞踏会すら縁がないのに仮面舞踏会なんて…アヴィス大丈夫かしら？

「そこであなたにお願いがあるんです」

アヴィスの心配をしつつ、わたしはヴューイ様の言葉に眉をひそめる。

「わたしにですか？」

「ええ、姫巫女があなたをとても気に入ったらしくて…あなたにも

舞踏会に出席するようにと」

「え…？わたしは普通の侍女ですよ？ドレスだって無いですし…」

「それは大丈夫です。わたしがちゃんと用意しましたから」

そう言ってヴューイ様はさっきの箱の中から若草色のドレスを取り出しテーブルの上に広げて見せた。

「綺麗…」

テーブルに広げられた若草色のドレスは光沢のある布で作られていて少し開いた胸元と裾には金の糸で美しい刺繍が施してある。

「あなたの眼の色に似合うと思ってわたしが選びました」

そう言うとヴューイ様はドレスに見惚れるわたしを優しく見つめる。

わたしの眼は緑で確かに色的には似合うだろうけど…。

「わたしにはそんな綺麗なドレス似合いません…アヴィス様の許可も頂いてませんし…」

「アヴィス嬢には先に許可を頂いておきました」

「でも…忍び込んだ事がバレてしまったら姫巫女様にもヴューイ様にもご迷惑をかけてしまいます」

「仮面で顔を隠すんだからバレる事はないですよ。それに舞踏会にはわたしも出席します。ルイーゼさんの側にいますから安心してく

ださい。それともわたしが信用出来ませんか？」

「そんな事はありません！」

「じゃ、決まりですね。ドレスの他に仮面や靴も箱の中に入っていますから使ってください。それとコレも…」

ヴューイ様はポケットから何かを取り出すとわたしの手の平に乗せた。

「これは？」

手の平に乗ってるのは下弦の月を模った紅と漆黒の石のついてる首飾り…。

「その首飾りはわたしからのプレゼントです。では、わたしが迎えに来るまでに準備をしておいてくださいね」

「……はい」

もう何を言っても無駄な気がして手の平の首飾りを見つめながら小さく返事をした。

わたしの返事に満足した様に微笑むとヴューイ様はその身を翻し扉の向こうに消えて行った。

再び静寂を取り戻した部屋に残されたわたしは近くにあったベッドに身を投げ出した。

……言いくるめられた気がするのはわたしの気のせいかしら…？

ヴューイ様に頂いた首飾りをぼんやり見つめながら大きなため息をついた。

このため息をつくクセは当分治りそうにないみたい……。

∵

第１４章

美しく飾り立てられた大広間では色とりどりの仮面で素顔を隠した来賓たちが楽団の音楽に合わせて蝶の様に舞っている。

「……はぁ」

壁際でわたしは羽扇に隠れて小さなため息を漏らした。

仮面で素顔を隠しているとはいえ場違いな雰囲気に仮面舞踏会を楽しむ余裕なんて全くない。

頼みの綱のヴューイ様と言えば……

「今宵こそはわたしくしと踊ってくださいませ」

「あら！今宵はわたしくしと……」

少し離れた場所で沢山の黄色い声に囲まれてる。

ヴューイ様は仮面を着けていても仮面からのぞく美しい紅眼と漆黒の髪で正体がバレバレ。

仕方ないと言えば仕方ないけど……。

「ずっと側に居てくれるって言ったのに……」

ため息と共にポロリと零れた言葉に自分自身が驚く。

これじゃ、まるで構って貰えない子供が拗ねてるみたいじゃない！

そう思うと急に恥ずかしくなりわたしは熱の集まった顔を伏せ、羽扇で隠した。

伏せた眼に映るのは胸元に輝くヴューイ様からいただいた首飾り。

紅と漆黒の宝石はまるでヴューイ様みたいで身に着けているだけで更に顔に熱が増してしまう。

「……暑いわね」

ごまかす様に羽扇を扇ぎながら呟くと熱を冷ます為、バルコニーに向かって歩き出した。

バルコニーに出て誰もいない事を確認してからわたしは手摺りに身を預けた。

「風が気持ちいい」

春の涼やかな風が熱を持った頬を優しく撫でる。

「こんな所でどうしたの？」

そんなわたしの耳元で聞き覚えのある声が響いた。

「ひめ……！」

「シー！この舞踏会で名前を口に出すのはルール違反よ？」
名前を出しそうになったわたしの口元を仮面を着けた姫巫女様がやんわりと人差し指で押さえる。
「……申し訳ありません」
「ふふ、そんなに畏まらないで。今はお互い身分も名前もないただの女の子なんだから」
そう言って笑う姫巫女様は仮面で素顔を隠していてもやっぱり綺麗でわたしは見惚れてしまう。
「突然、こんな舞踏会に招待してごめんなさいね。身体の方は大丈夫なの？」
「あ…はい、ヴューイ様のお陰ですっかり良くなりました」
「ヴューイのせいで風邪を引いたんでしょ？ヴューイにはちゃんとお説教しておいたからね」
巫女様の言葉に何故かわたしの胸がチクチクと痛み出した。
ヴューイ様がわたしとの事を姫巫女様に報告してても別に不思議じゃない。
でも……
「どうかしたの？」

胸の痛みを吐き出す様に深いため息を漏らすわたしに姫巫女様が心配そうな眼差しを向ける。

「いえ、慣れない場所で少し気後れしてるみたいです」

「そう、そう言えばヴューイは何処にいるのかしら？」

作り笑いを貼付けたわたしを姫巫女様は不思議そうに見つめる。

「……ヴューイ様は大広間で御令嬢様たちに囲まれて困ってらっしゃいました」

先程のヴューイ様と御令嬢たちのやり取りを思い出し、またチクチクと痛み出す。

今日のわたしは何だかおかしい。

まだ風邪が治りきってなかったのかしら？

「そんな顔しないで？」

「え？」

正体不明の胸の痛みに悩むわたしを姫巫女様が少し困った表情で覗き込んでいた。

「ヴューイも困った人ね。あなたにそんな顔させるなんて」

……わたし、どんな顔してるのかしら……？

姫巫女様の言葉にわたしは恥ずかしくなり慌てて両手で顔を隠す。
「……賭けはあなたの負けかしら？」
「……」
わたしの態度にクスリと笑いながら尋ねる姫巫女様に前の様に即答出来なかった。
負けるなんて絶対ありえません。
頭ではそう思っていてもわたしの口は言葉を紡いではくれない。
「あなたは正直ね」
無言で俯くわたしに姫巫女様はポツリと呟いた。
「わたし……正直なんかじゃありません」
「そんな事ないわ。もし、あなたが正直じゃなかったらきっと前と同様に否定したんじゃないかしら？」
「……」
「すぐに否定しなかったのはあなたが正直で自分自身ヴューイへの気持ちがわからないから…違う？」
……そうかもしれない。
この何日間、ヴューイ様にご迷惑をかけたけど一緒に過ごして楽し

かった。

楽しかったのと好きという気持ちが繋がるかはわからないけど一緒にいて嫌だとは全く感じなかった。

むしろ…アヴィスの事がなかったらもっと一緒にいたいと願ったかもしれない。

だから、わたしは否定の言葉を口に出せなかったんだ。

わたしは……ヴューイ様をどう思っているんだろ？

「わたし……」

「失礼いたします」

思い悩むわたしの言葉を慌てた声が遮った。

慌てた声に驚いて視線を向けるとわたしたちの背後で深々と頭を下げる王宮侍女の姿があった。

「お話し中のところ申し訳ございません。早急にお伝えしなくてはならない事がございます」

「……何かあったの？」

「はい。あの……」

少し表情を曇らせる姫巫女様に王宮侍女は言葉を濁しチラリとわたしに視線を向けた。

「わかりました。すぐに自室に戻るわ。それとヴューイにこの方のお相手をする様に伝えてちょうだい」

「え！？」

「かしこまりました」

姫巫女様の言葉に驚くわたしを余所に王宮侍女はまた深々とお辞儀をして足早にその場を去ってしまった。

「あの……？」

「今日はあなたと沢山お話出来て楽しかったわ」

恐る恐る声をかけるわたしに姫巫女様はニッコリと微笑む。

「……わたしこそお話出来て光栄でした」

「本来ライバルのわたくしがこんな事言うのもおかしいかもしれないけれど……色々考えるのは止めて単純に考えるのはどうかしら？」

「単純に…？」

「そう、人の気持ちなんて案外単純なものよ？じゃ、また会える時を楽しみにしてるわね」

そう言って微笑むと姫巫女様は来賓客で賑わう大広間に向かって歩き出した。

「……単純に……か」

姫巫女様を見送って一人になったわたしはベランダの手摺りに頬杖をついてポツリと呟いた。

好きか嫌いかで言えば至極単純かもしれない。

でも賭けの事を考えると単純には考えられない。

賭けに勝っても負けても所詮ヴューイ様にとってわたしは『期間限定』で姫巫女様やイリアス様の様に未来を期待出来るワケでもないんだから。

「こんな事なら王宮なんて来なければよかった……」

ため息と共に零れた本音は春の涼やかな風に攫われる様に消えて行った。

「おい？」

「え！？」

不意にかけられた声にわたしは弾かれる様に振り返とそこには見覚えのある護衛がニヤニヤと薄笑いを浮かべながら立っていた。

この人、以前かわたしが懲らしめた……。

わたしの脳裏にあの夜の出来事が思い出される。

「……何かご用かしら？」

「あんた……あの時の侍女だろ？」
正体がバレないように羽扇で顔を隠すわたしに護衛は薄笑いを浮かべたまま尋ねる。
「……」
沈黙を肯定と受け取ったのか護衛は薄笑いを深めると突然わたしの手首を掴み背後から羽交い締めにした。
「何を…！」
「少し静かにしてろ！」
そう言うと護衛は怒鳴ろうとするわたしの口元に布を押し付けた。
「！」
逃げなくちゃっ！
必死で護衛から離れようともがきながらも押し付られた布から香る薬品の様な匂いにわたしの意識がぼやけ手足の力が抜けていく。
助けて…！
薄れゆく意識の中で脳裏に浮かんだのはヴューイ様の顔。
助けて…ヴューイ……さ…ま…
心の中でヴューイ様に助けを求めながらもわたしは深い闇に吸い込

まれる様に意識を手放してしまった。

∵

第１４章（後書き）

今回はヴューイはちょっとお休みです。お話的にはルイーゼの心情が急性だった様な気がしますが…どうぞご勘弁を（；＾ω＾）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9936g/

姫巫女候補の侍女

2011年9月20日21時14分発行